

清原古墳群及び岩原古墳群の 周溝確認調査

(熊本県玉名郡菊水町・鹿本郡鹿央町)

1 9 8 2

熊本県教育委員会

清原古墳群及び岩原古墳群の 周溝確認調査

(熊本県玉名郡菊水町・鹿本郡鹿央町)

1 9 8 2

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、菊池川流域に「風土記の丘」を設置する構想に基づき、この地区についての資料を遂次整備してまいりました。

この報告書は、史跡拡大の資料作成を目的とした岩原古墳群(鹿央町)、清原古墳群(菊水町)についての古墳周溝確認調査の報告であります。この調査により、これまで知られていない古墳周溝の規模・形状等を明らかにすることが出来ました。

これらの調査結果は、今後史跡整備事業の中に生かされると思いますが、さらに、学術研究のうえにも活用していただければ幸いです。

現地での調査にあたり、地元の鹿央町・菊水町をはじめ、地区住民の皆様、地権者、耕作者の方々のご協力に対して心から感謝いたします。

昭和57年3月31日

熊本県教育委員会 外 村 次 郎
教育長

例　　言

1. 本報告書は『風土記の丘』構想に基づき、国庫補助を受けて、熊本県が昭和56年度に調査を実施した清原古墳群（菊水町）及び岩原古墳群（鹿央町）についての古墳周溝確認調査の報告である。
2. 調査対象の各古墳は、清原古墳群では虚空蔵塚・塚坊主及び京塚（伝）の各古墳で、岩原古墳群では双子塚を除いた各古墳及び各古墳参考地とした。
3. 現地での発掘調査及び発掘資料の整理は、文化課参考事務方（主査）があたり、また文化課嘱託森山栄一がこれを補助した。
4. 現地での調査について、熊本大学文学部白木原和美教授、山鹿市立博物館原口長之館長の指導と助言を受けた。
5. 本報告書の執筆分担は、I、II、III-1、III-3及びIVを緒方が、III-2について森山があたった。
6. 本報告書の編集については主として緒方があたった。

本文目次

| | |
|-----------------------|----|
| I 遺跡の位置と環境..... | 1頁 |
| II 調査の経緯..... | 3 |
| 1 事業計画..... | 3 |
| 2 調査経過..... | 4 |
| III 調　　査..... | 10 |
| 1 調査の方法..... | 10 |
| 2 清原地区の調査..... | 12 |
| (1) 虚空蔵古墳..... | 12 |
| (2) 塚坊主古墳..... | 21 |
| (3) 京塚(伝)古墳周辺..... | 32 |
| (4) 清原地区調査のまとめ..... | 36 |
| 3 岩原地区の調査..... | 39 |
| (1) 寒原古墳と寒原2号墳..... | 39 |
| (2) 馬不向古墳..... | 43 |
| (3) 古墳参考地A・B・C周辺..... | 44 |
| (4) 下原古墳..... | 51 |
| (5) 狐塚古墳..... | 55 |
| (6) 岩原古墳群出土遺物..... | 57 |
| IV 調査のまとめ..... | 64 |

挿 図 目 次

| | | |
|------|--------------------------------|----|
| 第1図 | 清原古墳群及び岩原古墳群位置図 | 2頁 |
| 第2図 | 虚空藏塚古墳平面図 | 13 |
| 第3図 | 虚空藏塚古墳1～5号トレンチ土層断面図 | 14 |
| 第4図 | 虚空藏塚古墳出土遺物(1) | 15 |
| 第5図 | 虚空藏塚古墳出土遺物(2) | 16 |
| 第6図 | 虚空藏塚古墳出土遺物(3) | 17 |
| 第7図 | 虚空藏塚古墳出土遺物(4) | 18 |
| 第8図 | 塚坊主古墳平面図 | 20 |
| 第9図 | 塚坊主古墳1～6号トレンチ土層断面図 | 22 |
| 第10図 | 塚坊主古墳出土遺物(1) | 26 |
| 第11図 | 塚坊主古墳出土遺物(2) | 27 |
| 第12図 | 塚坊主古墳出土遺物(3) | 28 |
| 第13図 | 塚坊主古墳出土遺物(4) | 29 |
| 第14図 | 塚坊主古墳出土遺物(5) | 30 |
| 第15図 | 京塚(伝)古墳周辺平面図 | 32 |
| 第16図 | 京塚(伝)古墳周辺3～6号トレンチ確認造構平面図・土層断面図 | 33 |
| 第17図 | 京塚(伝)古墳周辺7・8号トレンチ確認造構平面図・土層断面図 | 34 |
| 第18図 | 京塚(伝)古墳周辺出土遺物実測図 | 35 |
| 第19図 | 岩原地区古墳分布図 | 38 |
| 第20図 | 寒原古墳平面図 | 39 |
| 第21図 | 馬不向古墳及び周辺平面図 | 42 |
| 第22図 | 古墳参考地A・B周辺平面図 | 45 |
| 第23図 | 古墳参考地C周辺図 | 49 |
| 第24図 | 下原古墳平面図 | 52 |
| 第25図 | 狐塚古墳平面図 | 54 |

| | | |
|------|----------------------|-----|
| 第26図 | 岩原古墳群各トレンチ図(1) | 58頁 |
| 第27図 | 岩原古墳群各トレンチ図(2) | 59 |
| 第28図 | 岩原古墳群各トレンチ図(3) | 60 |
| 第29図 | 岩原古墳群各トレンチ図(4) | 61 |
| 第30図 | 岩原古墳群出土遺物(1) | 62 |
| 第31図 | 岩原古墳群出土遺物(2) | 63 |

図版目次

| | | |
|------|-------------------------------|-----|
| 図版 1 | 虚空蔵古墳 1 (各トレンチの状況) | 67頁 |
| 図版 2 | 虚空蔵古墳 2 (各トレンチの状況) | 68 |
| 図版 3 | 虚空蔵古墳 3 (各トレンチの状況) | 69 |
| 図版 4 | 虚空蔵古墳 4 (各トレンチの状況) | 70 |
| 図版 5 | 虚空蔵古墳 5 (各トレンチの状況) | 71 |
| 図版 6 | 虚空蔵古墳 6 (2号トレンチ出土人物ハニワ) | 72 |
| 図版 7 | 塚坊主古墳 1 (4・6号トレンチの状況) | 73 |
| 図版 8 | 塚坊主古墳 2 (周溝屈曲部の状況) | 74 |
| 図版 9 | 塚坊主古墳 3 (前方部コーナー付近) | 75 |
| 図版10 | 京塚(伝)古墳周辺 1 (各トレンチの状況) | 76 |
| 図版11 | 京塚(伝)古墳周辺 2 (各トレンチの状況) | 77 |
| 図版12 | 京塚(伝)古墳周辺 3 (土壤) | 78 |
| 図版13 | 岩原古墳群(古墳景観) | 79 |
| 図版14 | 寒原古墳他(各トレンチの状況と古墳景観) | 80 |
| 図版15 | 馬不向古墳(古墳景観と4号トレンチの状況) | 81 |
| 図版16 | 古墳参考地 A (各トレンチの状況) | 82 |
| 図版17 | 古墳参考地 B (各トレンチの状況) | 83 |
| 図版18 | 古墳参考地 C (景観と各トレンチの状況) | 84 |
| 図版19 | 下原古墳 1 (墳丘と10号トレンチの状況) | 85 |
| 図版20 | 下原古墳 2 (4・5号トレンチの状況) | 86 |
| 図版21 | 狐塚古墳 1 (古墳残丘と2号トレンチ) | 87 |
| 図版22 | 狐塚古墳 2 他 | 88 |

I 遺跡の位置と環境

清原古墳群は熊本県玉名郡菊水町にある。古墳群は、この町の中心地江田の西南500m余の地域に占地する清原台地上に点在する。この台地は行政区画のうえから大字江田、大字瀬川にわかれ、さらに、それぞれ大久保原、清原（以上大字江田）、および清水原（大字瀬川）の小字に分かれている。また、古墳群の位置を国土地理院発行5万分の1（昭和47年編集4色刷）に求めれば、図幅「玉名」の北より約7cm、西より約19cmのあたりに相当する。

この清原台地は木葉、江田をやくする小山塊（国見山388.8m、木葉山383.2m）の北西に尾根先の伸びる先端に所在する標高約30m、北側水田面との比高差約20m位の低丘陵地である。西は南流する菊池川によって区切られ、北は江田川の流域で限られている。

清原古墳群をとりまく主要遺跡について、江田川を挟んだ北側に諏訪原・皆行原の台地上には、諏訪原の遺跡群に弥生集落や斐棺群がある。またその台地の南端には若宮、穴觀音古墳の重要遺跡がある。また菊池川を少し下ると玉名平野で、その北側山麓に永安寺東・西、大坊、石貫穴觀音およびナギノの横穴群等の装飾古墳がある。その他、繁根木古墳^{ハタケ} 或は山下古墳といった重要遺跡も菊池川の下流域に集中している。

岩原古墳群は清原古墳の北北西、直線距離にして約7km、強いて言えば同じ菊池川流域に属している。古墳群は鹿本郡鹿央町大字岩原丘陵上にある。古墳の占地する丘陵上は寒原、塚原、馬下向、下原の各小字に分れている。この古墳群の位置を国土地理院発行5万分の1（昭和47年編集4色刷）に求めれば、図幅「玉名」の北より1.5cm、東より14.5cmのあたりに相当する。

古墳群のある岩原丘陵は米野山（311.8m）の北の山裾にあたり、標高80m前後、1km×500m位の丘陵で、北側は急斜面をなしている。丘陵と北側水田面との比高差は約50mである。東側は一段落ちの低位丘陵が東へはり出していて、丘陵裾に岩原の集落がある。

岩原丘陵上には双子塚をはじめ10指におよぶ古墳があるが、この周辺には多数の遺跡が密集している。隣接地として岩原丘陵地の北斜面に岩原横穴（装飾文あり）谷を距てて北には長岩横穴群（装飾7基を含む）、小原横穴群が、また東側の丘陵裾には桜の上横穴群がある。

（緒方）



第1図 清原古墳群及び岩原古墳群位置図

1 清原古墳群

2 岩原古墳群

II 調査の経緯

1 事業計画

補助事業に係る文化財の概要

岩原古墳群は鹿本郡鹿央町大字岩原にある双子塚古墳を主墳とし、下原古墳、馬不向古墳、寒原古墳の国指定史跡をはじめ、他に数基の古墳が存在する。このうち指定史跡以外の古墳の墳丘は失なわれかけている。

清原古墳群は玉名群菊水町大字瀬川にある古墳群で、ここには江田船山古墳をはじめ塚坊主古墳、虚空藏塚古墳がある。これらの三古墳はいずれも国指定史跡であるが、清原台地上にはこの他数基の古墳の周溝とみられるものが確認されている。

事業方針

イ. 調査は熊本県教育庁文化課が直営で行う。

ロ. 調査の組織。

調査責任者 熊本県教育庁文化課課長 岩崎 長喜 补助事業に係る収支予算

| | | | |
|-------|---------|------------|-----------|
| タ | 課長補佐(前) | 田辺 宗弘 | 収 入 |
| タ | タ | 林田 茂一 | |
| 調査 総括 | タ | 文化財調査係長 | 隈 昭志 |
| 調査 総務 | タ | 経理係長 | 大塚 正信 |
| 調査 総務 | タ | 教育文化課主事(前) | 矢野ミユキ |
| | タ | タ | 谷 嘉美子 |
| | タ | タ | 木下 英治 |
| 合 | 計 | | 6,000,000 |

調査担当者 タ 参事(主査)繙方 勉 支 出

タ タ 嘱託 森山 栄一

| 区 分 | 支出予定額 千円 |
|----------|-------------|
| 共 濟 費 | 34 |
| 賃 金 | 3,846 |
| 報 償 費 | 30 |
| 旅 費 | 811 |
| 一般需用費 | 860 |
| 役 務 費 | 69 |
| 使用料及び賃借料 | 350 |
| 合 計 | 6,000 |

2 調査経過

本事業の調査対象地域は、鹿央町の岩原古墳群と菊水町の清原古墳群である。各古墳群、とくにその周溝検出が予想される地点の大部分が農地で、個々それぞれの地権者の應諾を待って調査を実施した。また調査予定地の鹿央町にある岩原古墳群、そして菊水町の清原古墳群は、その間、直線距離にして約7km（路上距離にして約13km）に達する。そこで、時に応じ両地域の調査を平行して実施した。以下地点毎の調査の経過を日誌等から抄出した。

鹿央町岩原地区（岩原古墳群）

昭和56年5月7日(木) 南九州財務局の了解（下原古墳は国有地）を得て、下原古墳墳丘上の竹、雑木を伐採し、墳丘測量の準備から始める。墳丘上には櫟・栗などの雑木が生い茂り、とくに墳丘の北半は藪で墳形の見定められる状態でなかった。この下原古墳の藪払いと、墳形測量には数日を必要とした。

5月20日(木) 下原古墳の測量に統いて、寒原古墳・馬不向古墳周辺の地形測量をはじめる。5月21日、統いて古墳参考地C周辺の測量を実施。5月22日には下原古墳墳丘の雑木整理、あと片付けをする。

5月25日(日) この日になって地権者の了解が得られ、古墳参考地Cの西（3194番地）に初のトレンチを入れる。統いて、遂次トレンチの数を増やしていく。

6月1日(月) これまで古墳参考地C周辺の調査も北側（2287番地、目下人參栽培中）を除いて終り、馬不向古墳周辺の調査へと移る。6月4日には寒原2号墳横（3181番地）の地主の申出もあり、急遽この地点の調査を実施する。この畑は今のところ作付されていないが、雨を待って遂次甘藷を植付ける様子。あらためて、現に耕作されている畑の調査の困難さを知る。

6月8日(月) これまで、古墳参考地Cの各トレンチの理戻しを終り、地権者に調査協力について謝意をこめて挨拶する。一方、馬不向古墳では、東、西、南、北の各方面にトレンチを入れる。その後、下原古墳の雑木伐採、そのあと片付、発掘したトレンチの実測、写真撮影と作業が続く。

6月17日(木) 馬不向古墳の北側（3334番地）では樹間をぬって、遂次トレンチの数をふやし、周溝の内外の肩口を検出してゆく。また、地権者の了解が得られたので、古墳参考地Aの周辺調査に移る。

6月18日(木) 昨日来、古墳参考地Aの西に3条、東に1条のトレンチを入れたが、ここでは古墳周溝というより、むしろ近世以降の擾乱（遺構？）があらわれた。そこで、盛土の南側に発掘の手を伸ばす。6月19日までの古墳参考地A周辺の発掘の成果を集約すれば、盛土の南側に浅い周溝があることが判明、また東側にもその微候があらわれた。

6月22日(月) 週が変わり、調査地点を古墳参考地Bに移す。ここでも、先づ盛土の北、西、

南、そして東へと十文字にトレンチを入れる。午後4時頃には台風余波で雨に見舞われる。

6月25日(木) 調査を終えたトレンチの埋戻し、トレンチの新設、発掘と作業を続ける中、古墳参考地Bに設けた南側のトレンチから円筒ハニワの破片が出土する。

7月1日(水) 昨日は大雨、洪水注意報なども出ていて、遺跡一帯は水がたまりで作業困難。そこで調査地を、下原古墳の周溝検出に移す。墳丘東南に1号トレンチをあけ、やがて墳裾より1.5mのあたりに周溝の内側落ち込みを検出。7月2日以降、再び古墳参考地Bに移り、遂次周溝の行く手をおってトレンチの数を増やしていく。また、7月3日には、後作の大豆植付けのため9日まで調査を終え埋め戻すことを求められる。実際に、7日、8日と大雨豪雨と埋め戻しが完了せず苦慮した。9日には文化庁桑原滋郎技官来訪、現地の状況を説明する。

7月13日(月) 調査の重点を下原古墳に移す。先日発掘した1号トレンチをこれ以上延長出来ないので、樹間をぬってその横を掘り、周溝外側の落ち込みをたしかめる。この頃、古墳参考地の北側の畠(2286番地)の人参の収穫が済んだので、地主の上野氏を訪ね調査の協力を求める。

7月14日(火) 早速、古墳参考地Cの北側を発掘トレンチ3条設定、そこで溝の存在を確認。この溝は埋没状況から判断して古墳周溝の疑いが出てきた。

7月17日(金) 狐塚古墳周辺の雑木伐採、そして発掘準備。古墳参考地C北側の各トレンチ実測。午后は雷雨はげしく作業中断。

7月21日(火) 狐塚古墳は主体部の石室が露出し、崩土が石室のまわりをかこむ程度で、すでに半壊状態である。とりあえず、石室西側に長めのトレンチを設定する。発掘するおよび、石室横の擾乱土中より須恵(斐)の小片が出土した。7月23日、西側の1号トレンチに周溝が検出されなかったので一時調査を中断、東側の2号トレンチの発掘に着手。

7月28日(火) 狐塚古墳の2号トレンチでは、周溝の内側の落込みは早く発見されたが、外側の落ち込みはなかなかあらわれなかった。そこで思い切って掘下げることにした。ここでは地表下60cm余のところでやっと検出された。これを手掛けに、遂次に樹木の間を縫ってトレンチを設定した。

7月31日(金) 台風10号の余波で暴風雨。でも台風一過あとは急速に晴れた。狐塚古墳の各トレンチでも着実に周溝が検出されていった。1号トレンチ付近に周溝のブリッジがあるらしく、この地点については後日もう少し確認することにした。

8月5日(水) 寒原古墳横のビニールハウス(3178番地)、そこの西瓜の収穫も終り耕作者から調査について了解が得られた。そこで一時、狐塚、下原古墳の調査を中断、寒原古墳に調査の重点をしほる。この地区は山林と異なり、発掘も容易であるが、ハウスのためどこでも掘る訳にはいかなかつた。8月7日、1・2・3と各号のトレンチから周溝が検出される。2号トレンチでは不発の焼夷弾まであらわれる。これは長い年月のため、錆にて腐蝕され事なきを得た。

寒原古墳での周溝検出作業は8月上旬でほゞ終り、中旬に至り続いて墳丘測量、トレンチ実

II 調査経緯

測をする。

8月17日(月) 寒原古墳の周溝検出作業も終り、再び中断していた狐塚古墳の周溝、とくに6号トレントと5号トレントの間にブリッジのあるものと判断して試掘をする。一帯が山林のため立木が障害となり期待する成果は得られなかつたが、周溝は石室の西側にブリッジのあるものと見られる。

8月19日(水) 狐塚古墳の周溝検出作業もほど終り、調査の重点を下原古墳に移す。本日、県文化財保護審議委員の白木原和美、原口長之の両氏に、清原、岩原古墳群の古墳周溝確認調査についての指導と助言を仰ぐ。

8月28日(金) 下原古墳では墳丘を中心にして放射状に設定し、遂次トレントの数を増してゆく。周溝の肩口はほど予想された地点に検出されるが、3号トレント内側には覆土中にハニワの破片の多いことが知れる。また4号トレントではブリッジの一端が確認された。

9月1日(火) 9月に入りいよいよ調査も大詰めで、残った予算と時間で調査に一応の区切りと目安をつける必要に迫られる。下原古墳については西側の西瓜畑についても耕作者の予解がつき、6、7、8の各号のトレントを入れる。9月中旬に至り、4号トレントに検出された周溝ブリッジの反対側の検出につとめる。藏払いして試掘を実施したところ、9月16日になり反対側のブリッジの肩口を検出することが出来た。

9月18日(金) 本日をもって現地調査を終り、各方面の関係者に挨拶、調査資材を撤収した。

菊水町清原地区（清原古墳群）

菊水町の清原古墳群には質量共に豊富な出土物で知られる船山古墳をはじめ、虚空蔵塚、塙坊主の各古墳があつてこれまでに数次の調査を経ている。とくに地元が昭和50年に実施した遺跡確認調査では、主要古墳の周溝の状態、範囲確認を目的として実施された。今次はその追跡確認、新たに発見された「伝京塚」周辺の溝造構の性格究明という意味も含まれていた。この清原地区においても、調査対象地域は一部の公有地を含むものの大部分は私有地で、発掘調査を実施するには各地権者等の同意を必要とした。そこで作物の収穫を待って遂次調査をはじめた。

昭和56年5月12日(火) 午前中調査資材を現地に運搬、午後より虚空蔵古墳墳丘西側の畑（江田290-1）に3条の平行するトレントを設定（1号トレントの8m南に2号トレント、2号トレントの4m南に3号トレント）、1号トレントより発掘をはじめる。この地点はすでに昭和50年に調査が実施された経緯もあって、その時の土層の比較など試みる。

5月14日(木) 前日に引き続き1号トレントを調査、ここで現墳裾より2.5mのあたりに周溝内側の落込みが、更に墳裾より8.7mのあたりに周溝外側の落ち込みがあらわれた。また周溝内の最上層（Ⅲ層）からハニワ片が出土した。

2号トレントでも長さ13mの範囲にわたって発掘するが、トレント東端より1.5mのあたりに

周溝内側の落込みとみられるものが、また東端より12mのあたりに外側の落込みが確認された。このトレンチでは地山（花崗岩）の風化の程度の違いからか、周溝の内外ではかなり異った様相を呈した。

5月15日(金) 2・3号トレンチの発掘、或は拡張、1号トレンチの土層断面実測、および写真撮影を実施する。3号トレンチでは耕土の直下に地山があらわれるなど、他のトレンチと異った土層であることが確認された。2号トレンチでは3号トレンチ側へ拡張し、遺構のひろがりを追跡した。

5月19日(火) これまで周溝の範囲をどこにするか、いろいろ疑問が出てきた。調査を進めるうちに1号トレンチと2号トレンチの間に周溝のくびれ部があろうことが考えられるに至った。

5月21日(木) 2号トレンチの拡張区で花崗岩の母岩があらわれる。また母岩の上位にはハニワの破片や、銅銭が出土した。母岩の状況からして虚空蔵塚古墳の西側周溝は、この母岩のところで終っているものと考えられる。

5月28日(木) 1号トレンチの北約9mのところに5号トレンチを設定（4号トレンチは1・2号トレンチの中間に設定）発掘、ここでは耕土下に墳壙より1m足らずのところに周溝内側の落込みが、6m余りのところに外側の落込みが検出された。

6月1日(月) 1号トレンチの土層断面観察から、周溝落ち込みの線にそって遂次南に拡大した。この過程に、昭和50年菊水町で調査された時のトレンチが検出された。

6月4日(木) 1号トレンチと2号トレンチの中間に設定した4号トレンチを発掘。このトレンチの土層断面の観察により周溝の位置を確認、それで得た結果と1号トレンチの周溝内外の落ち込みを結びつけ、落ち込みの線を追跡する。その結果、1号トレンチ断面で周溝幅6m前後であったのが、4号トレンチでは溝幅9m前後と次第にひろがっていることが知れる。

6月8日(月) 4号トレンチと2号トレンチの間も、1・4号トレンチ間同様に周溝の範囲をもとめて拡張する。

6月16日(火) 2号トレンチを南へ（3号トレンチ側）へ拡張発掘。6月22日(月)に至り、周溝内土層の状態をしらべるため2号トレンチ拡張区での周溝内発掘。この周溝内の発掘作業は6月一ぱいかかり、層中にハニワ片が混入していた。作業を慎重に進めた結果、6月29日には人物ハニワの頭部を発見、発掘作業の進行とともに漸次ハニワの全容をあらわしてきた。そして7月3日、2号トレンチの土層断面作製、写真撮影を済ませ遺物の取上げを終る。人物ハニワの県内での出土事例はいく多數あるが、頭部が完好な姿で発見されたのは八代大塚古墳について虚空蔵古墳が二例目である。

7月6日(月) 各トレンチの埋戻し、人物ハニワの出土を知ったマスコミによる取材。7月9日(木)には虚空蔵古墳での周溝調査を終り塚坊主古墳の調査に移った。同日、文化庁の桑原技官が来訪、現地の調査情況を視察。

II 調査経緯

塚坊主古墳の周溝検出について、とくに前方部のコーナーの部位、前方部と後円部の境界屈折部の確認に調査の主眼をおくことにした。墳丘の東と南側については地権者の協力を得ることが出来ず、この際発掘を断念した。

菊水町大字瀬川字清水原427番地、この畠は現在桑園である。昭和50年清原遺跡確認調査の資料を参考にし、前方部コーナー検出を目的として桑の作条を縫って1～3号トレンチを設定した。統いて同トレンチの発掘、当初の予想どおり前方部のコーナーを検出した。

7月14日(火) 塚坊主古墳墳丘西側(瀬川⁴²⁹₄₃₀-1)の荒地の雑木伐採、焼却および墳丘の測量を実施する。

7月16日(木) 周溝検出を目的として、4～6号トレンチを設定、まず4・5号トレンチから発掘はじめる。17日には4号トレンチでは後円部の周溝を検出、同トレンチの写真撮影。一方、1～3号トレンチでは一部を拡大、前方部コーナーの部分を明確にした。7月20日以降5号トレンチの発掘、3号・4号トレンチの断面図作成、写真撮影、27日から6号トレンチを発掘にかかる。28日には1～4号の各トレンチを埋戻した。5号トレンチについては遂次北側へ拡大、昭和50年菊水町調査時のトレンチを検出、統いて塚坊主古墳の前方部と後円部のくびれ部を確認した。

7月31日(金) 5号トレンチ発掘、トレンチ拡大に伴い五輪塔の一部(空風輪)を検出と作図、各トレンチの断面図作成、トレンチの埋戻しを実施する。伝京塚周辺について地権者、耕作者の調査地発掘について了解が得られ、調査地点を伝京塚周辺に移す。

8月3日(月) 本日より船山古墳の西側にある伝京塚周辺の調査を実施することにした。現地には現在、墓地の横に家形石棺の残欠がある。まず石棺のある下方(西)の畠(江田348番地)に1～5号トレンチを設定した。1号トレンチは畠の幅に相当する長さ45mを発掘、2号トレンチはこれと平行して北側に長さ4.5mの範囲を発掘した。試掘の結果、1・2号の両トレンチでは溝等の遺構は検出されなかった。測量の結果をまつまでもなく、この附近の地形は昭和50年調査時点と異っていて、地均らしされている。

8月4日(火) 1、2号トレンチを埋戻し、伝京塚周辺の地形測量、4・5号トレンチの発掘をする。3・4・5号の各トレンチ、およびこれらのトレンチの拡大により溝状の遺構を発見。重ねて3～5号トレンチの東上方に6号トレンチを設定発掘、ここからも溝状遺構の一部を検出した。本日、前福岡市資料館長の三島格氏、上村熊日記者の来訪を受ける。

8月7日(金) 4号トレンチの土層断面図作成、菊水町歴史資料館への進入路附近に7号トレンチを設定、そして同地の発掘を実施した。運が変り8月10日(月)には、3～5号トレンチの溝状遺構と6号トレンチの写真撮影。7・8号トレンチの発掘をした。新設の8号トレンチは7号トレンチと共に、昭和50年調査により検出された「隣」についての追跡確認のためのトレンチである。

8月18日(火) 今まで各トレンチの発掘・実測・写真撮影および周辺の地形測量を終る。7・8号トレンチでは当初に予想された『陸』があらわれた。この中から石斧なども出土したが、近世陶片も混入していることから考えて近世以降の溝状の遺構とみられる。この伝京塚周辺で1～8号トレンチにより造構の検出につとめたが、ここでは直接古墳の周溝と認められるものはなかった。

8月21日(金) 清原地区では、今までに各トレンチの埋戻しを終り、虚空蔵古墳、塚坊主古墳の墳丘西側の周溝の状態を確認記録し、また伝京塚周辺では、可能な限りの古墳周溝確認を実施し調査を終了した。
(緒方)

III 調査

1 調査の方法

岩原古墳群には双子塚（前方後円墳）をはじめとし、寒原古墳、馬不向古墳、下原古墳の国指定史跡がある。双子塚については墳丘のほか周溝部が指定の対象となっており、他の3基については墳丘のみが指定されている。そこで双子塚を除く他の古墳、寒原2号墳、狐塚および数基の古墳参考地が調査の対象となった。

これまで数多くの古墳が調査され、多くの古墳には周溝が検出されている。しかし、古墳を囲繞する周溝の範囲となると必ずしも明確でなく、土層の識別、範囲認定の基準をどの層に求めるかによって違ってくる。そこで古墳の周溝の範囲をより適確におさえるためには、周溝のひろがりを追って全掘するほかない。

しかし、今次の調査事業を推進するには、予算額の割に調査対象地が広大で周溝の範囲を全掘することは勿論困難である。またとりわけ調査対象地が私有地であり、大部分が現に作付けされ、耕作されている土地である。生産基盤である農地を長期間借りることは無理で、個々に話をつけ、可及的に早目に調査を急ぐ必要があった。

以上の様なことから、岩原地区では墳丘に対して直角方向に遂次トレンチを入れ、埋土の状況から周溝を確認し、そのひろがりを求めるほかはなかった。発掘深度も原則的に表土（耕土）までに止め、必要に応じ一部に限り掘り下げることにした。

菊水町清原古墳群、なかでも船山古墳については調査研究の歴史は古い。明治6年地元の農家池田佐十により石棺が開口して以来、人々の関心を呼び、多くの研究者により論考が加えられている。また船山古墳周辺の塚坊主古墳については、昭和17年と同23年には京都大学梅原博士らにより調査が行われ、主体部の石室に装飾文のあることが確認されている。当時の出土資料については、京都大学陳列館に保管されている。

昭和50年には菊水町が調査主体となり、既知の船山・虚空藏塚・塚坊主の各古墳の規模の確認、壊滅古墳の有無、その他の遺構の存在を確かめるため清原台地の発掘調査が実施された。^注この調査により船山古墳の周溝の状態、規模がはじめて推定されるようになり、また虚空藏塚、塚坊主両古墳の周溝についての情報が得られた。伝京塚についてはいくつかの溝が検出され、古墳存在の可能性を示唆した。この他この時の調査により、首塚、オクボサンの墓等について多くの知見が得られた。

以上の様に清原地区については、過去数次にわたる調査でかなりの資料が揃っている。とくに昭和50年度の調査は、意図的に墳丘の規模等の確認を目的としただけに今次の調査目的と重複する部分が多い。

事業開始当初、「清原地区については、船山古墳の発掘は必要でない、虚空蔵塚古墳については、墳丘の西側の部位において前方部と後円部の屈曲部及び前方部の端末について追跡する事」また塙坊主古墳についても「墳丘西側の部位での前方部と後円部の屈曲部、前方部コーナーについての確認」を求められた。京塚(伝)古墳については「過去に発見された溝を追跡し、古墳周溝か否かの確認」をすることになった。清原台地上の虚空蔵塚、塙坊主両古墳及び伝京塚の各調査地点は、その一部を除いて私有地である。調査の目的を達するためには地権者又は耕作者の発掘調査についての了解を前提とし、その交渉の結果を俟つほしかった。発掘にあたり昭和50年度の調査を参考にして、周溝推定地に數条のトレンチを入れ、結果をまって遂次拡大した。さらに、虚空蔵塚については前方部端末周溝を発掘し、周溝断面等を調べることにした。（緒方）

注 この調査結果について、『船山』（玉名郡菊水町清原遺跡確認調査） 1976 熊本県玉名郡菊水町教育委員会。

2 清原地区の調査

清原台地における遺跡確認調査は昭和50年10月初から昭和51年3月末にかけて菊水町教育委員会によって行なわれており（以下、50年度調査とする）、今回の調査は50年度調査を参考にして行なった。よって、調査方法も50年度調査の結果に基づき各トレンチを設定した。今回は虛空蔵塚・塚坊主古墳の周溝および京塚（伝）古墳周辺の遺構を確認するに留めた。

(1) 虛空蔵塚古墳（第2・3図）

50年度調査での見解は前方後円墳とされており、今回は現存墳丘の西北側に5本のトレンチを設け、右側くびれ部から前方部までの周溝確認を行なった。

主軸をN-90°-Wにとり、前方部が真西に向く帆立貝式の前方後円墳である。墳長44.5m。後円部直径32.0m。前方部長12.5m。くびれ部幅18.0m。前方部前辺部幅27.0m？。後円部周溝幅7.5m。前方部側辺部周溝幅10.5m。

くびれ部から拡がる前方部側辺部周溝は途中で切れている。その箇所には花崗岩の母岩が露出しており、周溝が切れている事と関係するものであろう。尚、前辺部周溝については今回確認しておらずその有無は不明である。周溝外堤上の全長は52.0m以上と考えられる。

周溝の確認面は前方部側へ行くに従い深く、表土下22.0~45.0cmで確認した。土層は、1・4・5号トレンチでは耕作土（1層）・近世陶磁器小片を含む層（2層）・周溝覆土（3層以下）の層序が観察されたが、2号トレンチでは2層と周溝覆土との間に糸切り底の土師器皿を含む層（2号トレンチ4層）が観られた。確認面での周溝幅は1号トレンチ4.3m、2号トレンチ9.0m、4号トレンチ9.45m、5号トレンチ5.6mを測る。周溝の深さは、完掘した2号トレンチでは表土下1.20m、確認面下0.66mを測った。

出土遺物（第4~7図） 出土遺物は多量の埴輪片の他に、縄文式土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・古錢などの破片が少量出土した。（第4図）

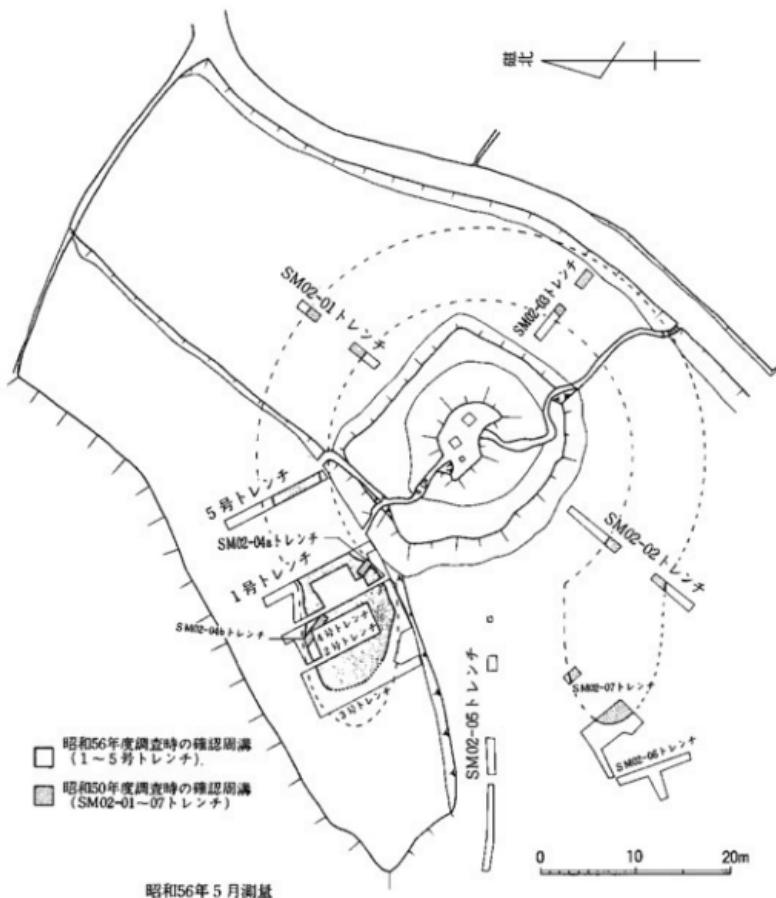
1・2は古墳時代須恵器である。1は復原口径12.3cmの壺蓋で、4号トレンチ東側拡張区4層出土である。胎土密、焼成良好、色調灰色~暗灰色を呈す。ロクロ回転は逆まわり。2は壺胴部破片で、2号トレンチ周溝内出土である。外面に木目直交の平行線文叩きを施し、内面はナデ仕上げがなされている。1・2共にⅠ期後半からⅡ期前半の特徴を示している。

3・4は土師器である。3は復原口径14.8cm高さ3.4cmで、底部外面には回転利用のヘラケズリ（順まわり）痕が残っている。4は回転糸切り底の皿で、底部外周をヘラケズリ調整している。復原口径7.3cm・高さ1.5cm。

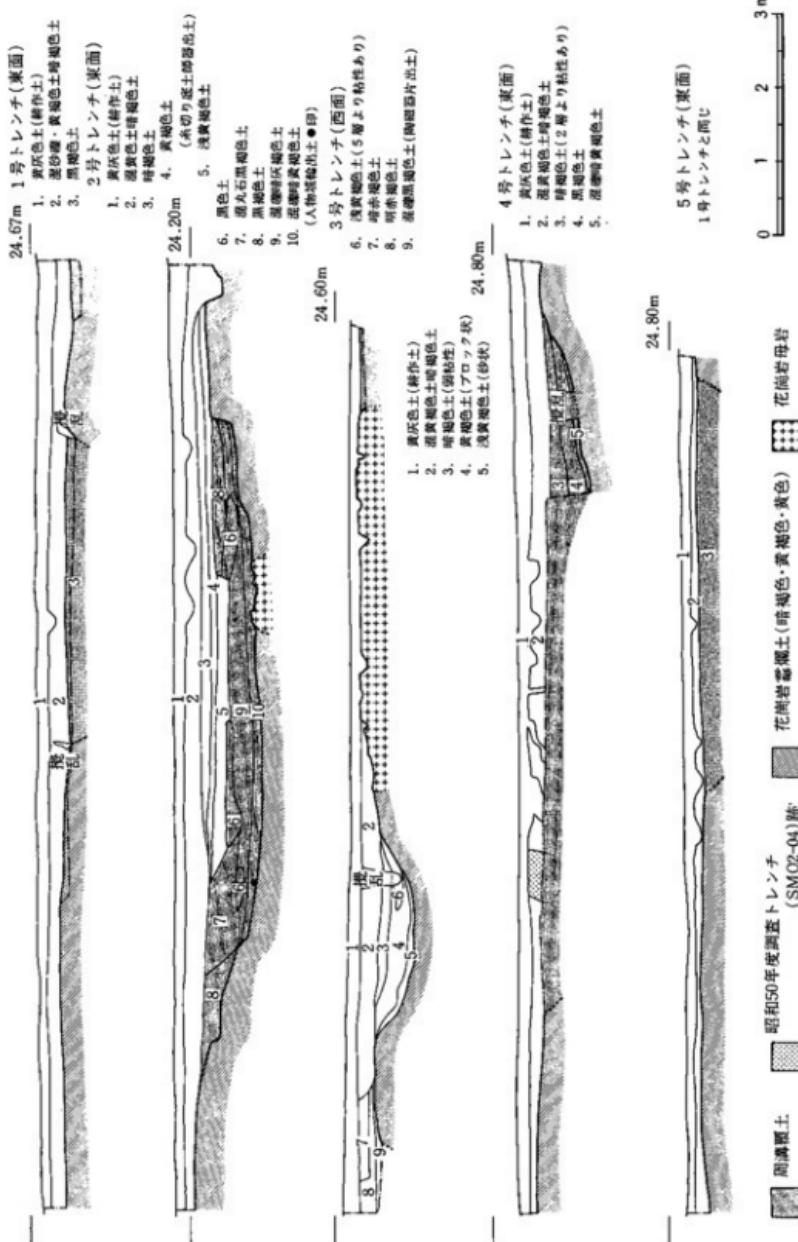
5~9は瓦器である。5は火舎の口縁部破片で、直口する口縁部直下に突帯をめぐらしている。突帯の下には5~6mm間隔に幅1.5~2.0mmの縦位の凹線状スタンプが施されている。復原

口径39.8cm。色調黒褐色。6～8は同一個体と思われる破片で、須恵質である。内面はヨコナデ、外面は格子目文叩きの後に部分的にナデが施されている。色調灰白色～暗灰白色。9は擂鉢破片である。外面は不定方向のナデ、内面は斜位の刷毛目調整後6本単位の条線を施している。色調灰白色。

10～15は陶磁器である。10は古伊万里染付碗の口縁部破片で、復原口径10.8cmを測る。胎土は白色で、内外面に薄緑色の釉薬がかけられている。11は古伊万里染付皿の底部破片で、復原



第2図 虚空藏塚古墳平面図

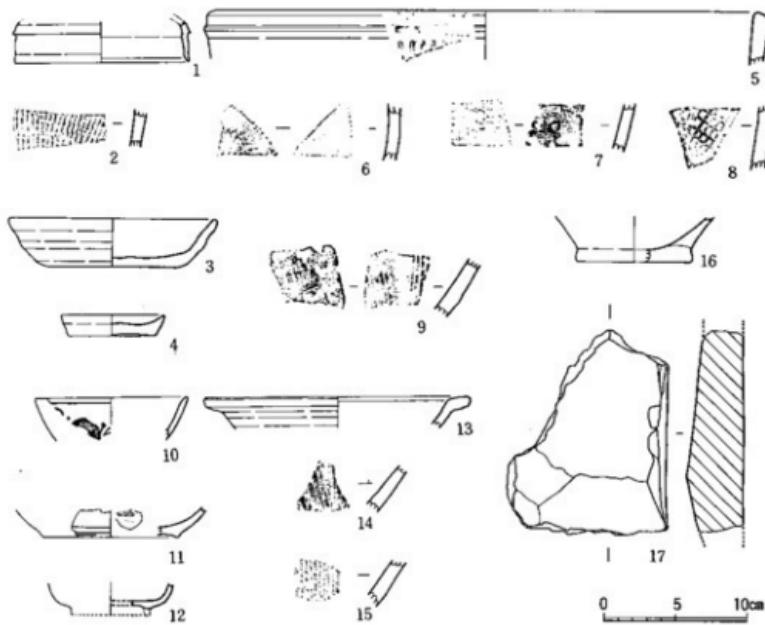


底径9.6cmである。胎土は白色で、底部外面を除いて薄緑色の釉薬がかけられている。12は窓不明の碗底の破片である。胎土は暗灰色で、全面に暗赤褐色の釉薬がかけられており、外面上位には更に水色の釉薬がかけられている。13は黒牟田焼の鉢口縁部破片である。全面に黒褐色の鉄釉がかけられている。復元口径19.0cm。14は備前焼の播鉢破片で、内面の切介は細い。胎土は暗灰色で、外面に赤褐色の釉薬がかけられている。15は黒牟田焼の播鉢破片である。胎土は橙色で、内外面に暗赤灰色の釉薬がかけられている。

16は縄文時代晩期の鉢形土器で、底部は円板貼り付けである。復元底径8.2cm。内外面とも黒色を呈する。

17は面取りされた板状石である。残存長13.0cm、残存最大幅10.5cm、厚さ2.8~4.0cmを測る。他に、2号トレンチ内花崗岩母岩上に古錢が出土したが、銹錆著しく年号銘は不明である。以上、出土遺物は大きく3時期に分けられ、古墳時代ー中世ー近世の遺物が出土しており、この事は土層々序と一致するものである。

尚、50年度調査では古墳時代遺物として須恵器の蓋杯が出土しており、それはⅢ期の特徴を示すものである。しかし、今回の調査ではⅠ期後半からⅡ期前半に比定し得る蓋破片が出土し

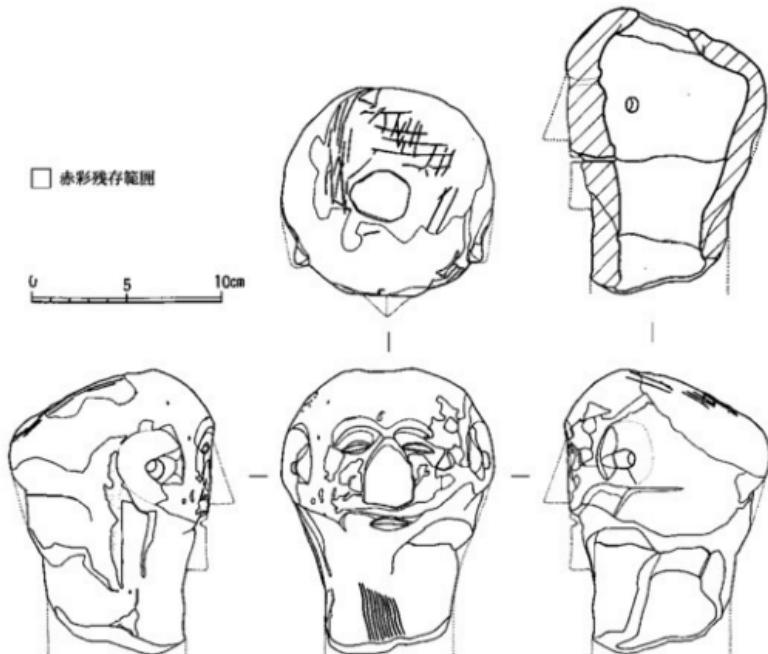


第4図 虚空藏塚古墳出土遺物(1)
9・11・15—1号トレンチ
2・3・6・7・8・12・13・14・16・17—2号トレンチ
1・4・5・10—4号トレンチ

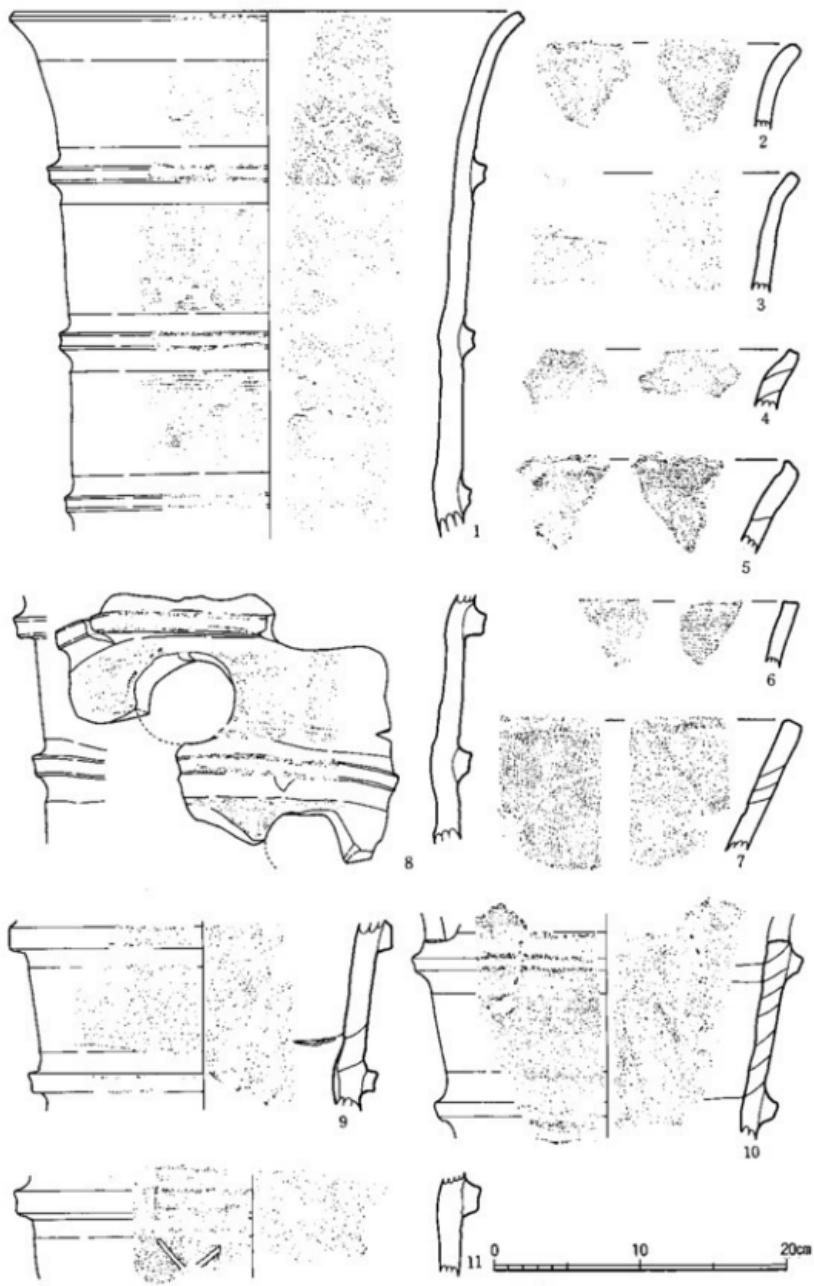
Ⅲ 調査

た。出土状況は糸切り底土師器などを含む層からの出土であるが、内面ナデ仕上げを施した甕胴部破片が周溝内から出土しており、蓋と同時期かと考えられる。よって、虚空藏塚古墳の上限をⅠ期末～Ⅱ期前半まで遡らせ、Ⅲ期までの年代幅を持たせたい。

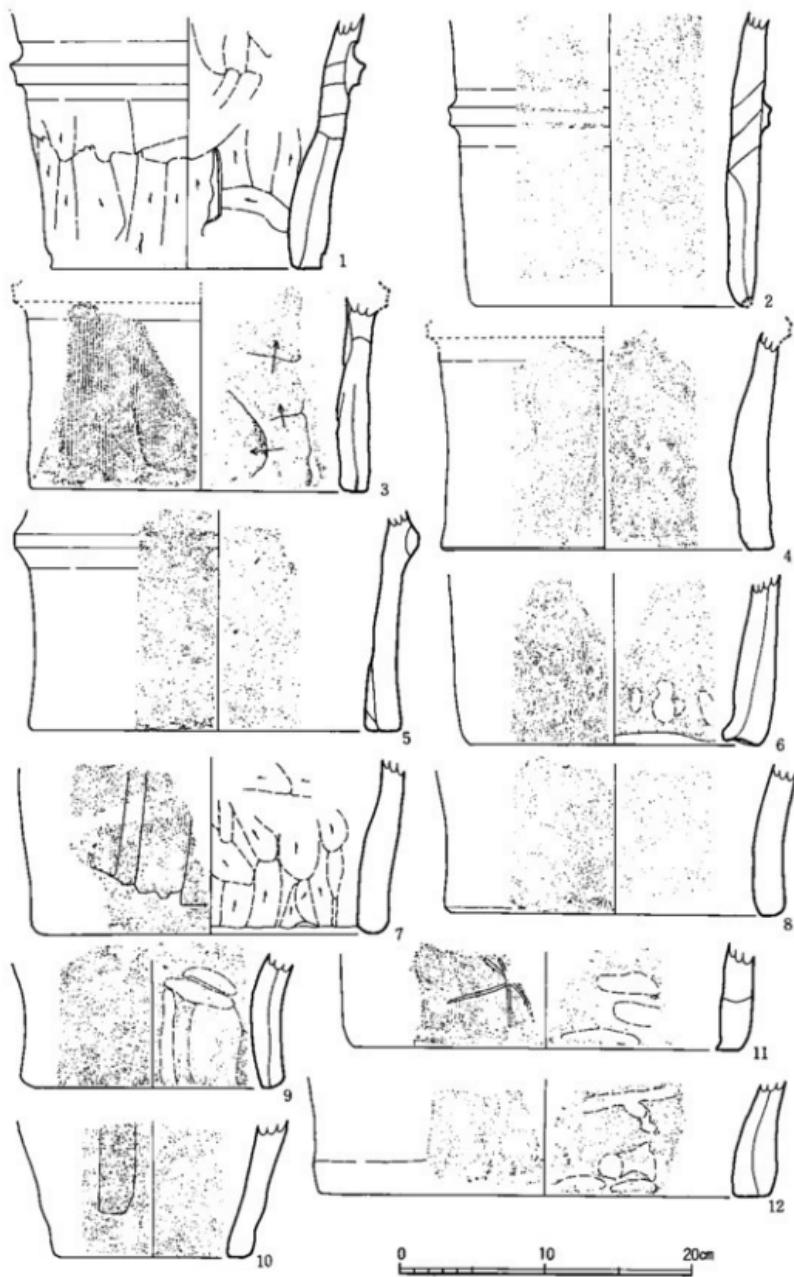
人物埴輪（第5図） 2号トレンチ10層から、周溝底直上に顔を伏せ頭を西に向いた状態で出土した。首から上で、鼻・頸および耳の一部は欠損。現存高15.0cm。頭部左右最大幅11.4cm。頭部前後最大幅10.85cm。頭部最大円周34.7cm。胎土は1～5mmの石英粒を多く含み密。焼成良好。色調は外面暗赤褐色、断面淡黄色～黄橙色を呈する。首から顔・頭部にかけては幅3.5～4.0cmの粘土帯を輪積みにし、頭頂部は幅1.5cmの粘土紐で成形している。厚みは、後頭部で0.9～1.4cm、顔面で1.2～2.4cm。首正面に2mm間隔のハケが2cm幅でタテ（↑）方向に残っているが、本来全面に施されたものがナデによって消されたのであろう。頭頂部には2.6cm×3.2cmのほぼ円形の孔が穿たれており、その周辺には長さ1～3cm、幅0.5～1.5mmの刻みが竪状工具の先端部で縦横に施されている。恐らく頭頂部には板状粘土で髷が表現されていたものであ



第5図 虚空藏塚古墳出土遺物(2)



第6図 虚空蔵塚古墳出土遺物(3)



第7図 虚空藏塚古墳出土遺物(4)

り、その接合をよくするために刻みが施されたものと考える。目と口はきれ長半円形をしており、下辺を直線に、上辺を曲線にえがかれている（目長1.6～1.7cm・最大幅0.6cm、口長2.1cm・最大幅0.6cm）。耳は直径0.8cmの円形。目・口・耳ともに外面から内面まで通している。耳朶はほぼ円形（左直径3.0～3.5cm、右直径4.0～4.5cm）にめぐるが、下前側で切れている。顔面赤彩され、暗赤褐色の顔料が両頬と左目上から左側頭部にかけてと首右側に5～6mm幅の帯状に2条観られる。赤色顔料は他部位にも点在しており、恐らく顔全面・左右側頭部および首左右（正面には施していない）に施されたものであろう。

円筒埴輪（第6・7図）は大部分が円筒形埴輪であり、一部朝顔形埴輪と思われるものも出土したが図示できなかった。

口縁部（第6図1～7）は、緩く外反するもの（1～5）と直に外傾するもの（6・7）があり、前者では更に端部が内湾するもの（4・5）がある。外面は1次調整のタテハケが施され、端部周辺は更にヨコナデを施している。内面はヨコハケ・ナデ調整を施している。焼成良好なものは橙色を呈し、焼成不良のものは浅黄橙色を呈している。

タガ部（第6図8～11）は、浅い中凹の台形を呈しやや突出度の高いものが大部分を占め、他に中凹無くやや幅広く低いものもみられる。タガ装着の際は器壁に浅い凹線をめぐらして貼り付けたものと、そのまま貼り付けたものとがある。調整は丁寧なヨコナデを施し、タガ部に対応する内面は隆起している。

器壁外面は1次調整のタテハケの後に2次調整としてのヨコハケが施されている。ヨコハケはタガ間の幅より狭い工具で施しており、その施し方は明瞭ではないが連続的なものである。しかし、外面調整のヨコハケはタガ部ヨコナデ仕上げ以前に施されている。内面はほとんどがナデ仕上げされているが、部分的にヨコ・ナメハケが残っているものがある。

スカシ孔は、器壁内外面調整・タガ調整終了後に穿たれている。孔形略円形のみである。8は上下のスカシ孔が近接して配されている。

底部（第7図）は全体的にナデによって整えられている。底部は粘土板で作製されたものが多く、そのうち同大の粘土板を貼り合わせたもの（1～3、6・9・12）や大きな粘土板を外側にしてその内側に小さな粘土板を一定の順序で貼り合わせたもの（3）がある。この粘土板による底部の作製は調整に関係しており、特に内面は強く丁寧なナデ仕上げが顕著である。外面も1次調整のタテハケが部分的に残るが、全体的にナデ仕上げによって消されている。他に1のように外面をヘラケズリしたものもある。

第6図11・第7図11の外面にヘラ状工具による条線があるがヘラ記号であろうか。

本古墳出土埴輪は、タガ部形状・外面調整のヨコハケ・粘土板貼り合わせの底部など、全体的に作りが丁寧である。



昭和56年7月測量

第8図 塚坊主古墳平面図

(2) 塙坊主古墳 (第8・9図)

今回は現存墳丘の西側に6本のトレンチを設定し、特にくびれ部と前方端部コーナーの周溝確認を主目的とし調査した。

主軸をS-55°-Wにとり、前方部がほぐ南西に向く前方後円墳である。墳長44.3m。後円部直徑30m。前方部14.3m。くびれ部幅15.0m。前方部前辺部幅21.3m。後円部周溝幅5.1m。前方部側辺部周溝幅5.3m。前方部前辺部周溝幅4.0m。

1~3号トレンチにおいて前方部端末コーナーを検出したが、現表土は現存墳丘裾面より1m前後低く削平されており、そのため検出した周溝も幅の狭い底部付近であった。周溝は表土下30~50cmで確認し、幅2.0~2.5mを測る。完掘した第2トレンチでは確認面からの深さ21cmを残すのみであった。土層は、1・2号トレンチでは耕作土と周溝覆土との間に糸切り底の土師片を含む層が観られるが、3号トレンチではコーナー部分を深く切った層（3号トレンチ2層）があり近世陶器片が出土した。

5号トレンチは面上に発掘し、くびれ部を確認した。周溝は表土下50cm前後で確認したが、現存墳丘裾側が高く外堤側に緩やかな傾斜をなしている。周溝内に須恵器と共に瓦器片も出土し、くびれ部付近に五輪塔の一部（空風輪）が出土しており、削平によるかなりの擾乱を受けている。確認面の周溝幅は、後円部3.0m、前方部側辺部5.5mを測る。

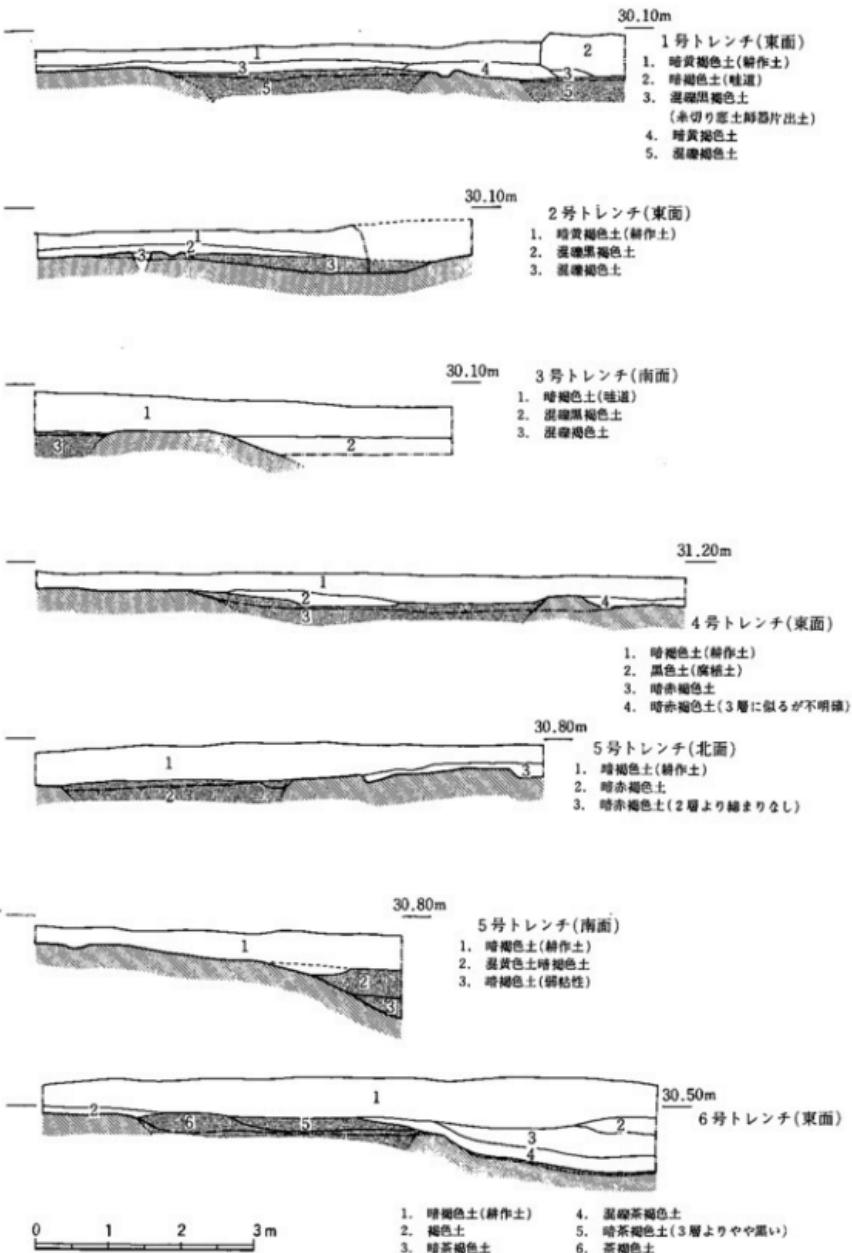
4号トレンチでは表土下22~26cmで周溝を確認し、周溝幅5.0mを測る。

6号トレンチでは表土下50~70cmで周溝を確認したが、後世の落ち込みでかなり切られており、周溝幅3.9mを測った。

出土遺物（第10~14図） 出土遺物は多量の埴輪片・須恵器片の他に、縄文式土器・土師器・瓦器・陶磁器などの破片および五輪塔の一部が出土した。（第10図）

とくに、5号トレンチの古墳周溝くびれ部付近では著しい擾乱が観られ、古墳時代遺物（埴輪・須恵器・土師器）と中世遺物（土師器・瓦器・五輪塔）とが多量の破片となって共出した。

1~13は古墳時代須恵器で、復原図化できたものである。1・2は壺蓋で、共に焼成は良好堅緻、色調灰色を呈す。2は天井部を欠損するが、1は天井部をヘラケズリし他の部分はヨコナデが施されている。ロクロ回転は順まわり。復原口径は1・2ともに13.0cmを測る。3は壺で、口縁部・底部を欠損する。焼成は良好堅緻で、色調灰色を呈す。底部はヘラケズリし他はヨコナデが施されている。ロクロ回転は順まわり。復原最大径12.6cm。4は器形不明の口縁部破片で、焼成不良で、色調灰白色を呈す。復原口径14.2cm。5は高壺で、焼成は良好堅緻、色調は灰色を呈す。身部内面はヨコナデの後に不定方向のナデがされ、外面底部はヘラケズリの後にヨコナデが施されている。脚部は内外面ともヨコナデが施され、内面には身部接合の際のシボリ痕が観られる。ロクロ回転は順まわり。6は壺類頸部で、焼成は不良、色調は灰白色を呈す。外面はヨコナデを施し、肩部内面は指による押圧（ナデカ）が施されている。ロクロ回転



第9図 塚坊主古墳1～6号トレンチ土層断面図

は順まわり。内面には1.5cm前後の間隔で粘土接合痕が観られる。7~10は甕口頸部で、外面にカキ目を施すもの（7・8）と無文（ヨコナデ）のもの（9）がある。口縁端部の形状は前者の方がやや複雑であるが、両者とも丁寧なつくりである。カキ目以外はヨコナデが施され、ロクロ回転は全て順まわりである。7は焼成やや不良で、色調は外面暗灰色～灰色、内面灰白色を呈す。復原口径18.4cm。8は焼成良好堅緻で、内外全面に自然釉がかかり、色調は内外面灰褐色～黒緑色、胎土紫灰色を呈す。復原口径21.2cm。9は焼成不良で、色調灰白色を呈す。復原口径19.2cm。10は焼成良好堅緻で、内外全面に自然釉がかかり、色調は内外面暗緑色、胎土灰色を呈す。復原口径24.1cm。この他に、頸部に波状文を施した甕も出土した。11~13は器台である。11は身部で、焼成は良好堅緻、色調は外面暗灰色、内面灰色を呈す。内外全面ヨコナデの後に、体部中位の幅2mmの小突帯を境にして上位に波状文を3段、下位に木目直交の平行線文叩きが施されている。ロクロ回転は順まわり。復原口径30.6cm。12は脚筒部で、焼成やや不良、色調灰白色を呈す。外面は2本の沈線を境に上下に各々カキ目の後に波状文を施している。内面はヨコナデ。ロクロ回転は順まわり。スカシ孔は三角形を呈し、上下が直交して各々4個づつを配している。13は脚端部で、焼成やや不良、色調灰白色を呈す。内外面ともヨコナデされている。スカシ孔は三角形を呈し、4個配するものであろう。復原脚部径28.5cm。

14・15は古墳時代土師器である。ともに胎土緻密、焼成良好・色調明橙色を呈し、丁寧なナデが施されている。14は高环身部で、復原口径13.5cmを測る。15は甕口縁部で、復原口径13.6cmを測る。

16・17は糸切り底の土師器皿で、内面中央に同心円文のスタンプが施されている。調整はヨコナデである。16は焼成良好で、色調暗黄褐色を呈し、内面の一部に煤の付着を観る。復原口径10.2cm。17は焼成良好で、色調は外面浅黄橙色、内面にぶい橙色を呈す。復原底径10.4cm。

18~25は瓦器である。18は甕口縁部で、胎土緻密、焼成良好、色調浅黄橙色を呈す。復原口径15.1cm。19は火舎で、焼成良好、色調淡黄灰色～にぶい橙色を呈す。内外面ナデ調整が施されている。貼り付け突帯下に3重の方形と対角線を組み合わせた文様のスタンプが捺されている。復原口径37.4cm。20は鉢で、焼成良好、色調にぶい橙色を呈す。外面はヨコナデされ、内面には横位および斜位の刷毛目が施されている。復原口径25.2cm。21は擂鉢で、焼成良好、色調外面にぶい黄褐色、内面綠黑色を呈す。外面はナデられ、内面は体部と底部に6本単位の条線が施されている。復原底径14.6cm。22・23は火舎底部付近のもので、ともに焼成良好で、内外面ナデ調整が施されている。また両方共底部近くに突帯が貼り付けてある。22は、色調が外面褐灰色、内面浅黄橙を呈す。突帯のつくりは丁寧である。突帯以下は縦位の刷毛目の後にナデ仕上げを施している。復原底径は16.5cm。23は色調がにぶい褐色～黒褐色を呈し、丁寧なナデが施されている。復原底径20.5cm。24・25は鉢で、同じ形態を示す。焼成良好。色調は24が外面にぶい褐色～黒褐色、内面褐灰色～暗褐灰色を呈し、25は内外とも褐灰色～暗褐灰色を呈

Ⅳ 調査

す。調整は外面および口縁部内面はナデを施し、体部内面には横位の刷毛目調整を施している。復原口径は24 φ 22.4cm、25 φ 22.2cmを測る。

26~29は陶磁器である。26は2号トレンチ出土であり、前方部前辺部右側コーナーの周溝外側を切った落ち込みの埋土より出土した。有田系高台付皿で、胎土は灰白色を呈し、全面に薄い暗緑色の釉薬がかかっている。また全面に貫入があり、疊付きには砂粒が付着している。復原口径11.9cm、削り出し高台径5.2cmを測る。27は唐津系灰釉磁器皿で、胎土はにぶい黄橙色を呈す。復原口径11.6cm。28は嬉野焼の皿で、胎土灰白色を呈す。口縁部外面から内面まで暗緑色の釉薬がかかり、特に外面口縁部直下には濃くかかっており藍色を呈す。外面下位にも白色透明の釉薬がかかっている。復原口径17.6cm。29は唐津系の鉢か大皿と思われる。削り出し高台の内外もヘラケズリを施し、外面上位はヨコナデが施されている。胎土はにぶい橙色を呈し、内面は明緑灰色の釉薬がかかっている。復原高台径9.0cm。

30・31は繩文式土器である。30は、胎土に1~3mmの石粒が多く含み、焼成良好である。外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリを施し、上位に壠線状の沈線がめぐる。色調は外面褐色~暗褐色、内面黒褐色を呈す。31は外面を貝殻条痕を施したもので、胎土は1mm程の石粒を多く含んでいる。焼成良好で、明橙色を呈す。30・31は共に繩文時代晩期に比定されるが、30の方が先行するものである。

32は五輪塔のうちの空風輪である。高さ22.0cm、空輪最大幅16.0cm、風輪最大幅18.1cmを測る。うち柄長4.7cm、同最大幅7.2cm。凝灰岩製でやや風化している。

以上、塙坊主古墳も虚空蔵塙古墳と同様に、古墳時代~中世~近世の大まかな三時期の遺物が出土した。特に中世における古墳への介入は大きかったものと考えられ、古墳時代須恵器と瓦器の破片が混じて出土していたことからもうなづける。

尚、50年度調査では出土須恵器をⅠ期後半からⅡ期の特徴を示すものとされており、今回の調査においてもそれを変える遺物は得られなかった。

5号トレンチから出土した多量の須恵器破片は同一個体と観られながらも接合復原し得なかった。そこで、主に叩きとナデの調整技法について観察してみた。(第11図)

1~4は、外面に木目平行の平行叩き目、内面にナデ仕上げを施したものである。平行叩き目は凸部細く、凹部の幅2~4mmを測る。色調は外面暗灰色、内面灰色を呈し、焼成堅緻である。恐らく同一の甕胴部破片で、計31片が出土した。

5~8は、外面に木目平行の平行叩き目、内面に同心円叩き目を施したものである。平行叩き目および同心円叩き目の凸部細く、凹部の幅4~6mmを測る。赤焼けのもので、外面暗橙色、内面浅橙色を呈す。同一個体の破片で、計4片出土した。

9~15は、外面に木目直交の平行叩き目、内面にナデ仕上げを施したものである。9~12は焼成不良、色調灰白色を呈す同一個体で、磨耗著しく叩き目は不明瞭である。平行叩き目の凹

部幅は3～4mmを測る。また12の内面には同心円叩き目が僅かに残っており、凹部幅5mmを測る。計17片が出土した。13～15は、外面叩きの後カキ目を施したもので、焼成良好、色調灰色～暗灰色を呈す。平行叩き目の凹部幅3mmを測る。計3片が出土した。

16～20は、外面に木目直交の平行叩き目、内面に同心円叩き目を施したものである。16・17は斐胴部破片で、灰色～暗灰色を呈する同一個体と思われる。計35片が出土した。平行叩き目の凸部細く、凹部幅3～4mmを測る。同心円叩き目は円弧状を呈し、凸部が細いのに対し凹部は幅広く5～6mmを測る。18～20は、外面叩きの後カキ目を施したものである。18は内外面に、19は内面に各々自然釉がかかり、20は内面の一部にナデ仕上げが施されている。平行叩き目の凹部幅は18・19が3mm、20が4～5mmを測る。同心円叩き目については、18・19は凸部細く凹部幅は3～5mmに対し、20は凸部幅広く2.5～3mmを測り凹部は1～2mmとやや細い。18・19に対して20は別個体と思われる。

21～24は、外面に格子叩き目、内面に同心円叩きを施したものである。格子叩き目はやや不明瞭だが凹部幅3～3.5mm四方の方形を呈し、同心円叩き目は凹部細く幅1mmを測り、凸部は幅2mmを測る。胎土中の空気が膨張し器壁がふくらんだり、表裏分離したものが多く、色調は外面暗灰色、内面灰色を呈す。同一個体の破片で計24片が出土した。

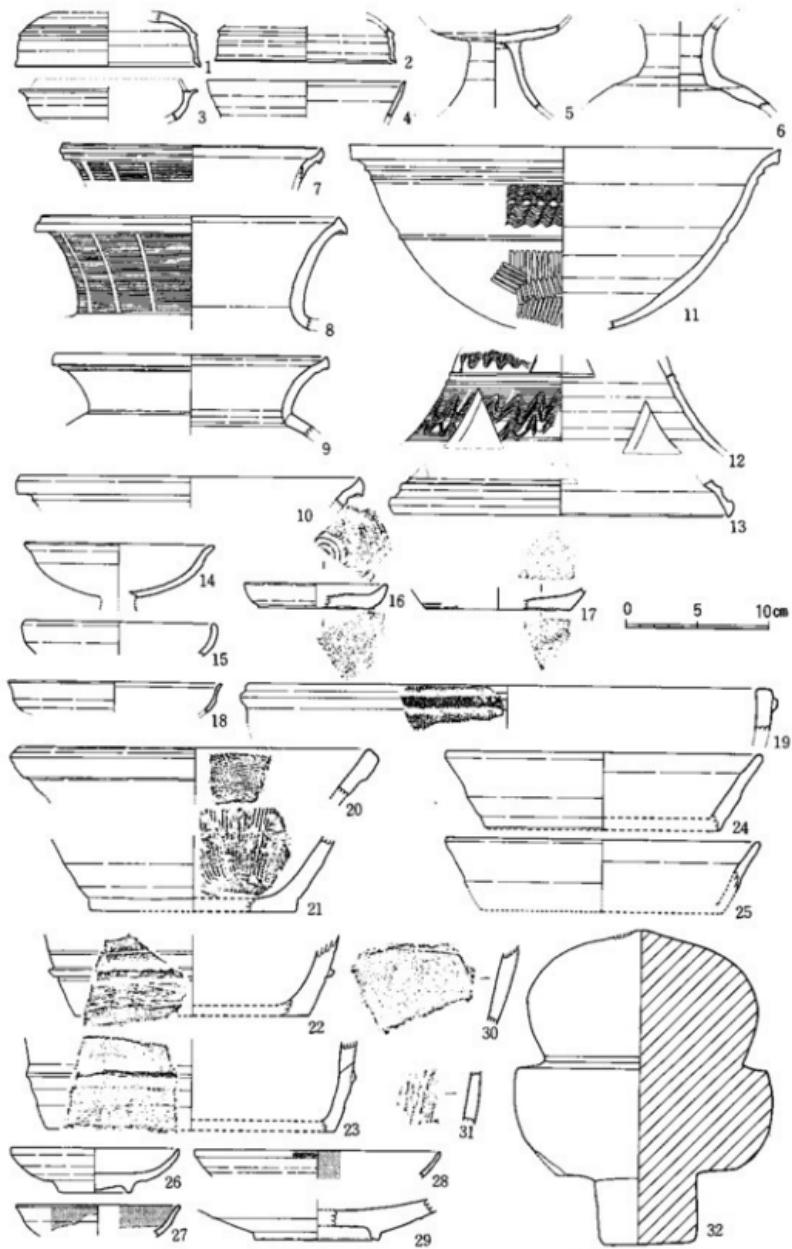
25・26も、外面に格子叩き目、内面に同心円叩き目を施したものであるが、21～24とは異質である。25は、灰色～暗灰色を呈す。格子叩き目は凸部1mm、凹部幅2～3×3～4mmの長方形をしている。同心円叩きは、完全な円状を呈し凸部幅1mm、凹部幅4～5mmを測り、凹線が5重にめぐっている。26は、焼成やや不良で、色調赤褐色～暗赤褐色を呈す。格子叩き目は凸部幅1mmで、凹部幅4×7mmの長方形をしている。同心円叩きは凸部幅2～4mm、凹部幅3～4mmを測る。25・26は各1片づつ出土した。

27は、外面に一見平行叩き目、内面に同心円叩きを施したものである。凸部幅1～2mm、凹部幅2～3mmを測り、特に凹部内には低く幅1mmの直交する凸部が3条走っている。

以上、塚坊主古墳出土須恵器の叩き目を観たが、5～8・25～27は凹部幅が他のものより広く、古墳時代より下る所産のものであろう。今回出土した古墳時代須恵器では、大きく外面叩き目に平行と格子との2種類がある。平行叩き目に対応する内面はナデ仕上げを施したものと同心円叩きのままのものとの2種類があるが、格子叩き目では内面は同心円叩き目だけでナデ仕上げのものはみられない。平行叩き目にも叩き板の木目に平行するものと直交するものがあり、後者には格子目ふうにみえるものもある。しかし、この木目直交の平行叩き目が、格子目を意識して刻まれたものかどうか明確にし得ない。

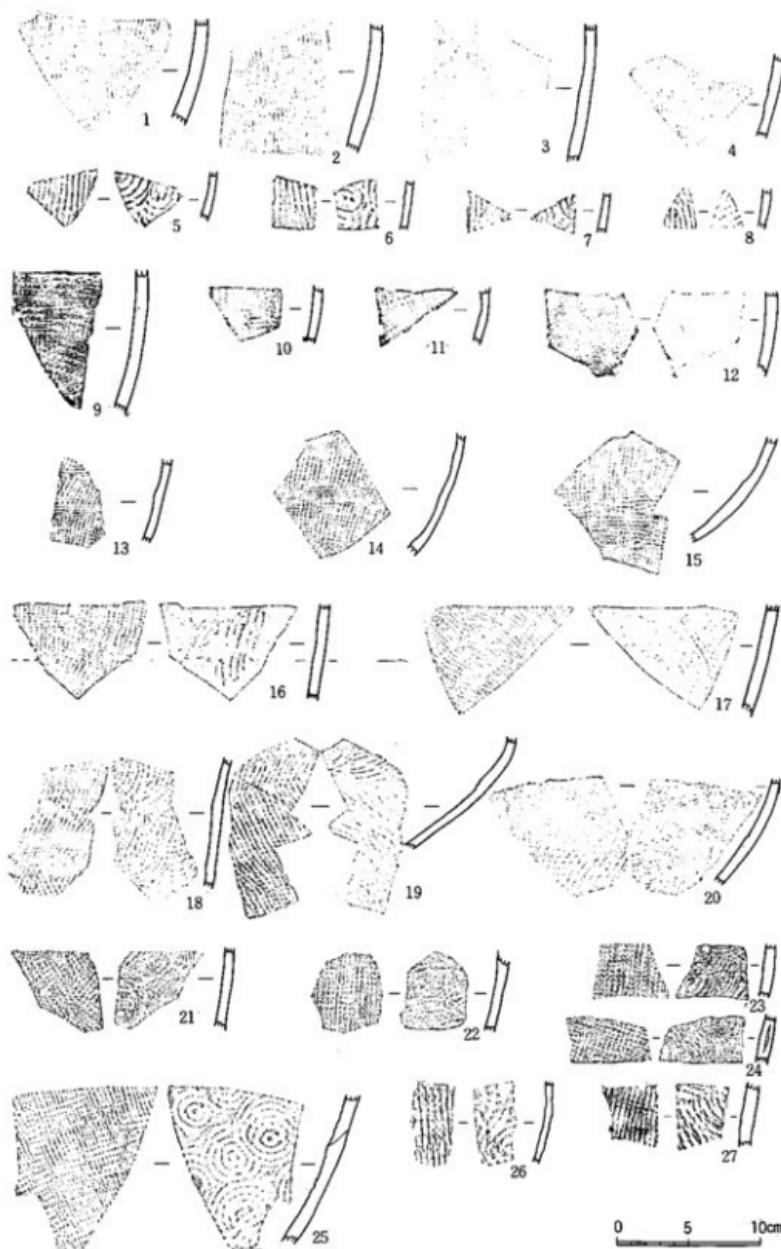
内面は同心円叩きのままにされているものと、その後にナデ仕上げを施したものとが共伴しており、古い様相がみられる。

形象埴輪（第12図1～6）は6片出土した。1は人物埴輪の鼻の破片で、焼成良好、色調橙

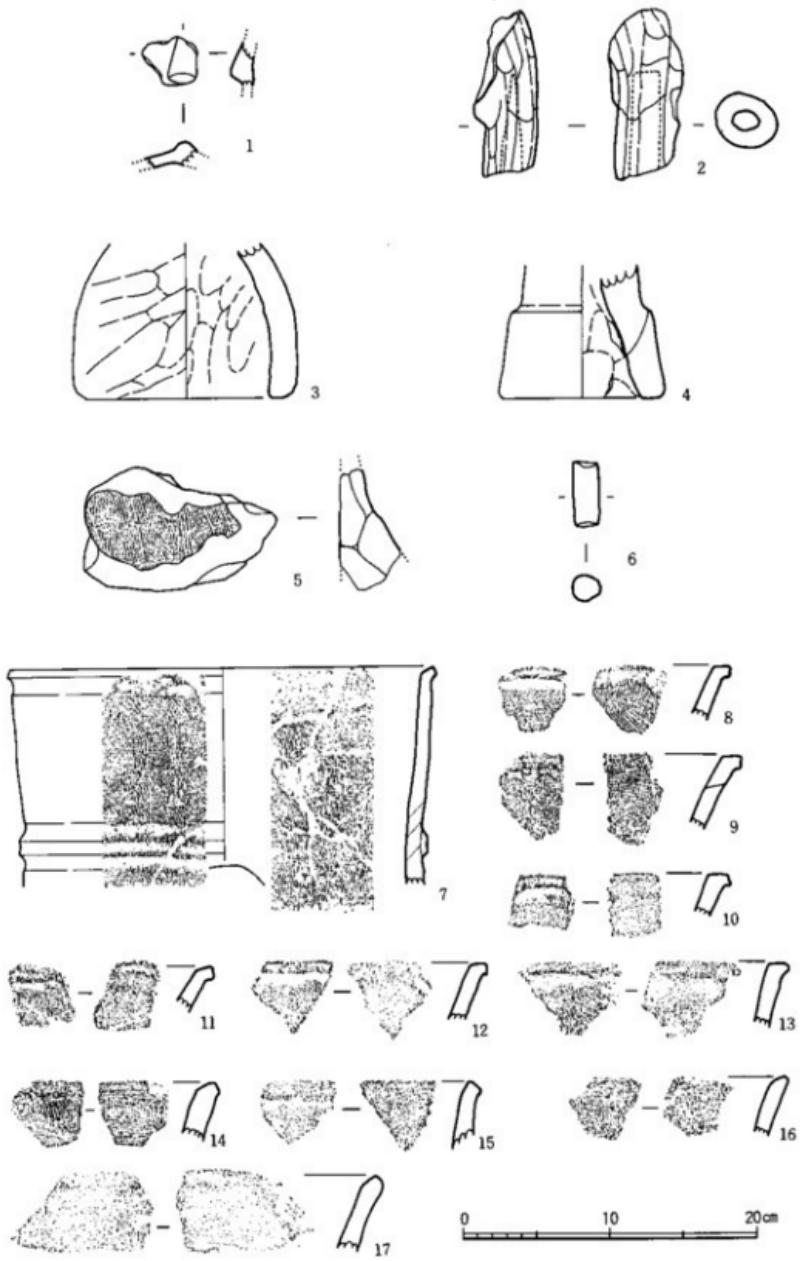


第10図 塚坊主古墳出土遺物(1)

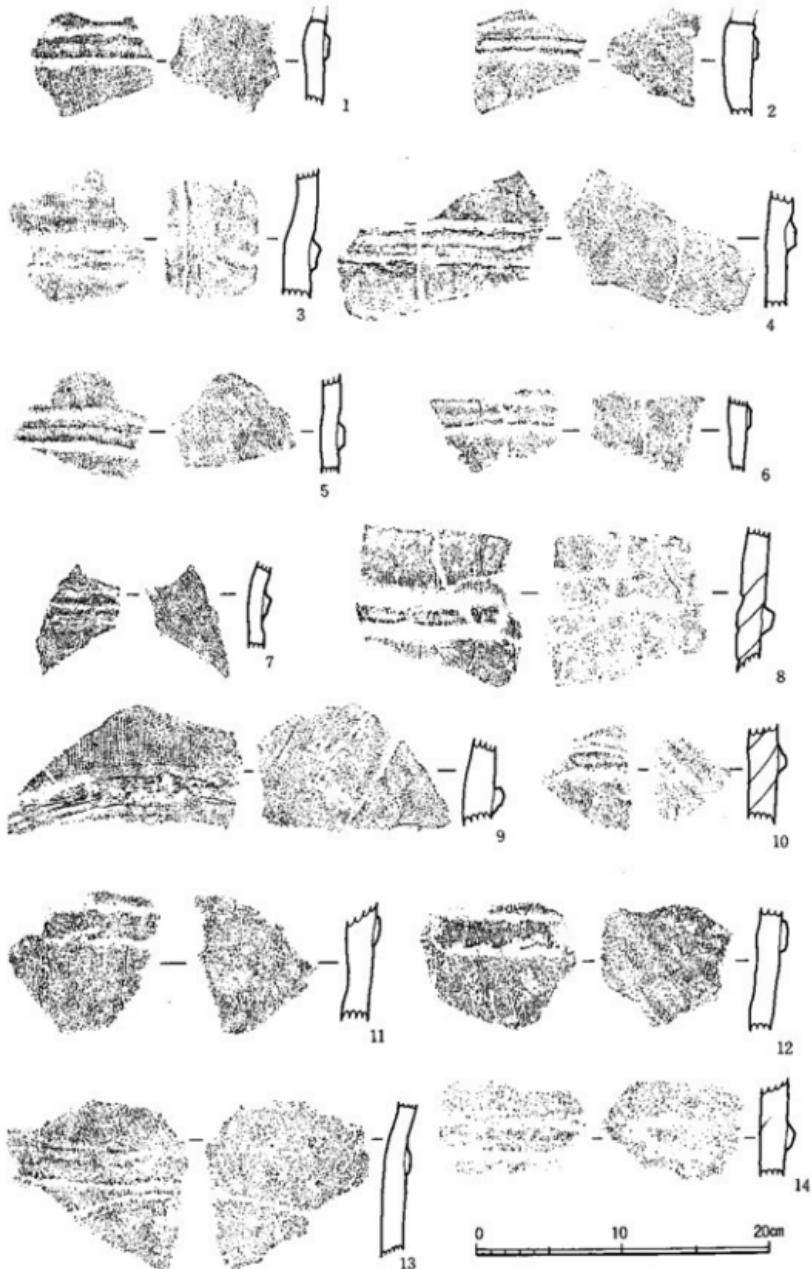
26—2号トレンチ
1~25, 27~32—5号トレンチ



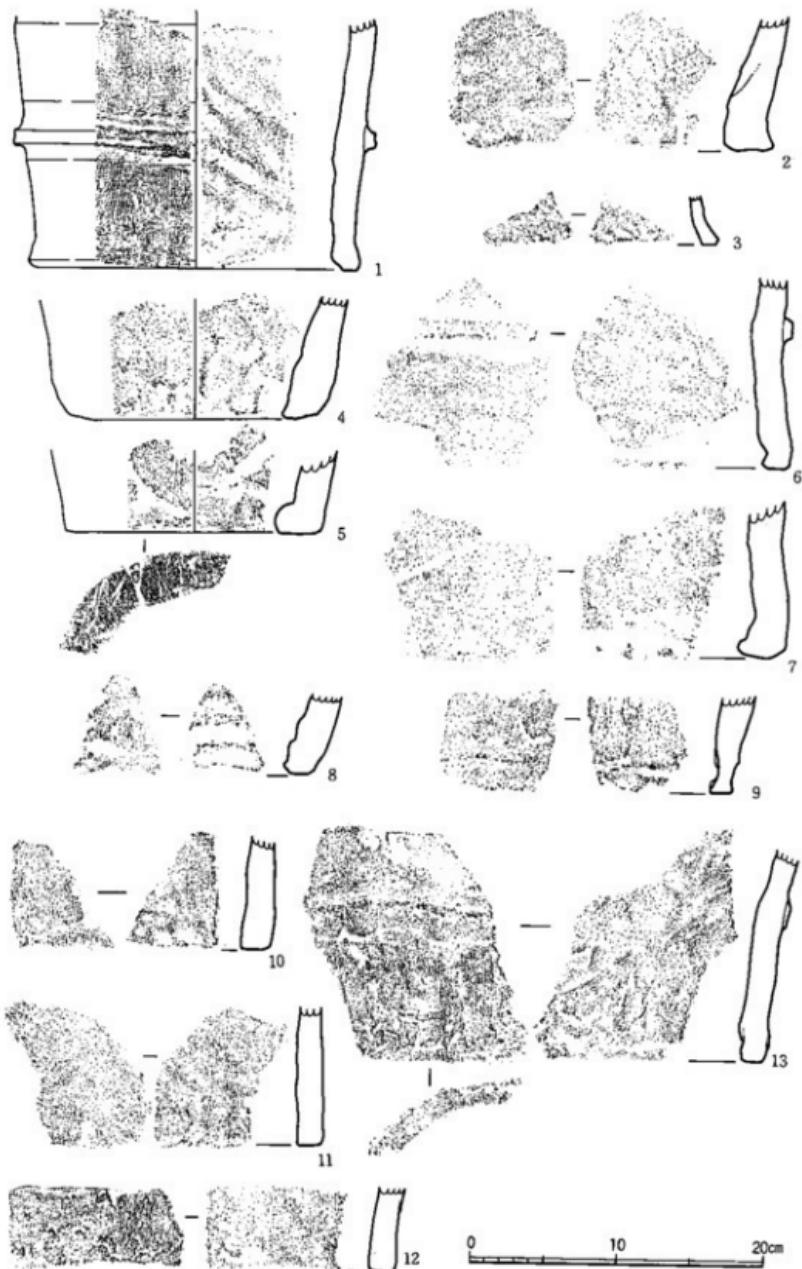
第11図 塚坊主古墳出土遺物(2)



第12図 塚坊主古墳出土遺物(3)



第13図 塚坊主古墳出土遺物(4)



第14図 塚坊主古墳出土遺物(5)

色を呈す。内面は指ナデを施している。鼻高0.8cmを測る。2は人物埴輪の腕の破片で、左右何れか不明だが、肩から上腕にかけての部位である。外面はヘラケズリ整形の後にナデ調整を施している。残存長10.9cm、最大幅4.3cmを測る。3は復原にやや無理はあるが、基底部と思われる。袋状に内寄して立ち上がり、復原残存高10.4cm、底径15.2cmを測る。内面はノ方向の指ナデを、外面はノ方向のヘラケズリ後ナデを施している。焼成は良好堅緻で色調にぶい黄橙色を呈す。4は有段の筒形を呈し、復原底径11.3cm、残存高9.9を測る。外面ヨコナデ、内面指ナデを施している。焼成良好、色調にぶい黄橙色を呈す。5は外面が全くの平坦面を成し、2cm幅に10条前後の刷毛目が施されている。内面はナデ調整を施し、厚み1.5~4.2cmと幅がある。6は円形棒状を呈し、残存長4.3cm、径1.7~1.9cmを測る。焼成良好、色調橙色を呈す。

円筒埴輪（第12図7~17・第13・14図）はほとんどが円筒形埴輪であり、明確に朝顔形埴輪と分かることは見当たらなかった。

口縁部（第12図7~17）は、端部が強く屈折するもの（7~13）、弱い屈曲を呈するもの（14~15）、ほぼ直に外傾するもの（16~17）の3形態がある。どれも調整は、外面タテ・ナナメハケ、内面ヨコ・ナナメハケが施されており、その後に端部および周辺はヨコナデが施されている。焼成良好なものは橙色を呈し、焼成不良のものは浅黄橙色を呈し外面に赤彩を施しているが、形態差による違いとは思われない。

タガ部（第13図）は、その形状が浅い中凹の低い台形を呈したもの（1~6）が大半を占め、その他に崩れた様な形のもの（7・9・10）や中凹無く突出度や高いもの（8）等が數片みられる。11~14は端面を押圧したものであり、最下段タガと思われる。タガは1次調整としてのタテ・ナナメハケ調整後に貼り付けており、その際にいったん器壁に横方向の浅い凹線をめぐらして貼り付けたものと、そのまま貼り付けたものとがある。タガは押圧技法以外はすべてヨコナデ調整を施している。内面はタテ・ナナメハケ調整の他に、多くはナデ調整が施されている。1・3・5の内面はタテハケ調整の後にナデ調整が施されており、大半のナデは内面の2次調整とも考えられるが明確でない。色調は焼成良好のものは橙色、焼成不良のものは浅黄橙色を呈す。

底部（第14図）は、自重により端部が外に反るもの（1~3）、内側に反るもの（4~7）、形を丁寧に整えたもの（10~13）などがある。調整はタテハケの他に、ナデ調整がある。特に内面は指による縱・横方向のナデおよび押圧が多く施されている。8・9は横方向のナデである。底部の形を整えたものの外面は板状工具による押圧というよりも、ナデ仕上げかと思われる。全体として、調整技法は外面をタテ・ナナメハケが1次調整として施され、2次調整としてのヨコハケはみられない。内面は縱・横・斜め方向の刷毛目調整の他に指によるナデ調整が多用されている。刷毛目は凹部幅0.5~1mm、凸部幅1~2mmを多く測る。

Ⅷ 調査

(3) 京塚(伝)古墳周辺 (第15~17図)

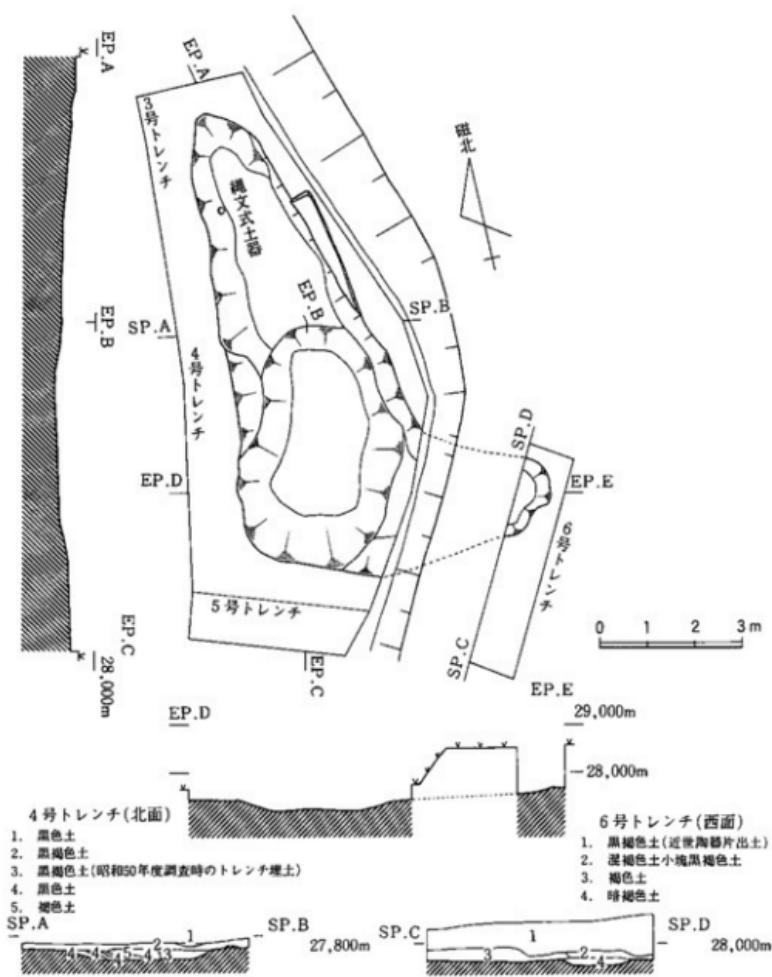
50年度調査で確認された消滅古墳の一つ京塚古墳については、今回は調査し得なかった。

1・2号トレンチでは10cm前後の耕作土の下は地山面であるが、造構は全く検出されなかつた。段々畝を1枚に平すためにかなりの削平を受けたとの事である。

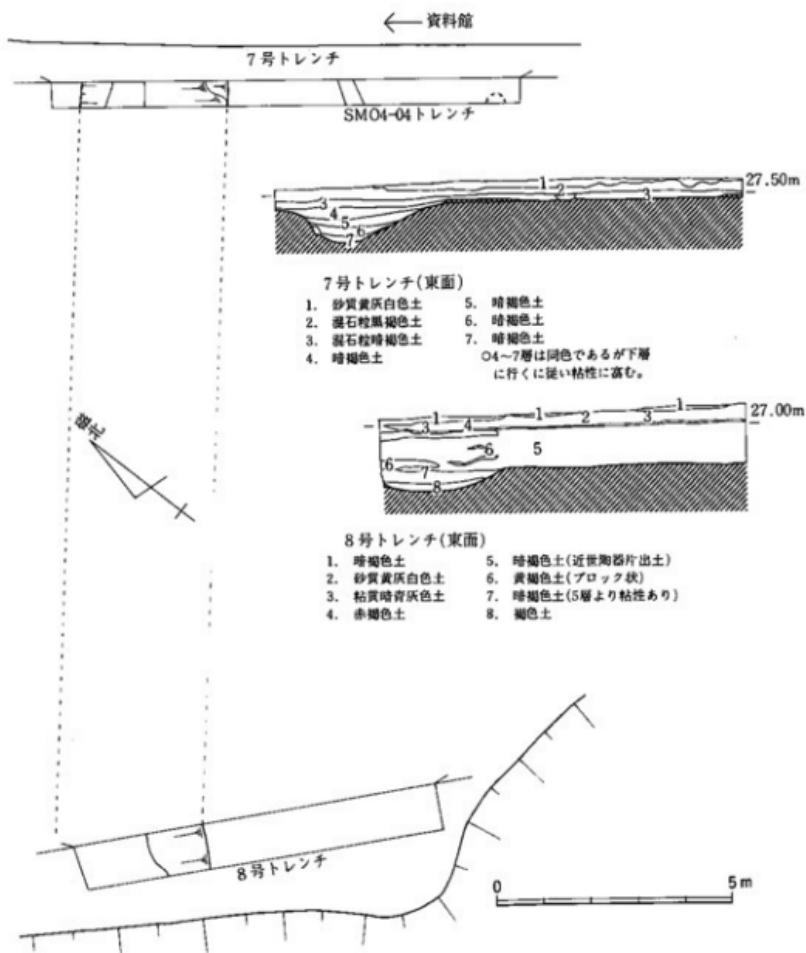
3~6号トレンチは50年度調査で性格不明の溝と報告された地点に設定したものである。今回3~5号トレンチを拡張完掘したが、溝とは考えにくい。南北方向で10.35m、東西方向で6.



第15図 京塚(伝)古墳周辺平面図



第16図 京塚(伝)古墳周辺3～6号トレンチ確認構造平面図・土層断面図



第17図 京塚(伝)古墳周辺7・8号トレンチ確認遺構平面図・土層断面図

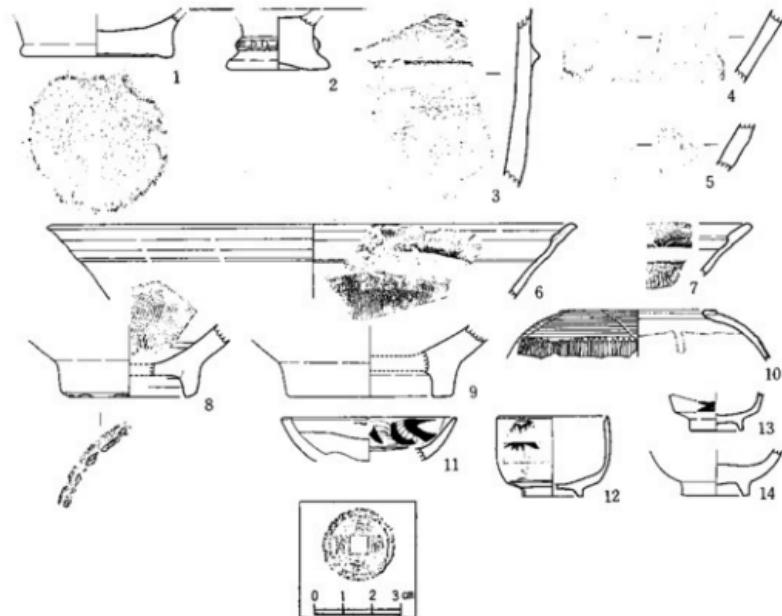
7mを測るL字形の土壤状を呈する。土壤内からは黒曜石剝片の他に縄文時代中期の土器底部が床直上に出土しており、上層の瓦器・陶器片を出土する堆積土とは明らかに古い時期と考える。

7・8号トレンチで確認した溝状造構は北東—南西に走る同一溝であろう。7号トレンチ確認の断面形状は南東側が緩やかに、北西側がやや急に立ち上がっており古墳周溝に似るが、古墳時代遺物が全く出土しておらず、周溝とは考え難い。確認面より上の堆積土からは近世陶器片が出土しているが、溝覆土の出土遺物が無く時期は不明である。

出土遺物(第18図) 今回設定したトレンチでは古墳時代遺構を検出できず、出土遺物も古墳時代のものは皆無であった。出土遺物は、縄文式土器・瓦器・陶磁・石器・古銭である。

1・2は縄文式土器である。1は深鉢形土器の底部で、底径10.9cm、底部厚さ1.6~1.9cmを測る。焼成やや不良で摩耗し、調整不明である。色調はにぶい褐色~暗褐色を呈す。中期から後期のものであろう。2は高杯形土器の脚部で、復原底径7.3cm、あげ底の厚さ3.2cmを測る。焼成やや不良で風化著しく、調整不明である。色調は赤褐色を呈す。晩期のものである。

3~5は瓦器である。3は火舎で、突堤の上に鈍い円弧を重ねた文様のスタンプが捺されて



1~3~4号トレンチ、2~14~5号トレンチ、8~13~6号トレンチ
3~5~7号トレンチ、4~6~7~8号トレンチ

第18図 京塚(伝)古墳周辺出土遺物実測図

いる。内面は磨耗して不明だが、外面はヨコナデを施している。4・5は擂鉢破片で、ともに内面に条線が残っている。焼成良好で、色調は灰白色～褐色を呈す。

6～14は陶磁器である。6・7は黒牟田窯の擂鉢で、ともに焼成良好、胎土赤褐色を呈し、内側へ折り返した口縁部内外に暗赤褐色の釉薬がかけられている。6の復原口径37.6cm。8は武雄南部系の鉢底部である。焼成良好、胎土は赤褐色を呈する。豊付きを除く内外面に暗赤褐色の釉薬がかけられている。内面には重ね焼き痕の砂粒帯が残っている。復原底径11.9cm。9は武雄南部系の擂鉢底部である。焼成良好、胎土は赤褐色を呈する。内面の条線は10本単位である。高台内側端付近を除く内外面に灰褐色の釉薬がかけられている。内面と豊付きに重ね焼の痕がみられ、内面に砂粒帯がめぐり、豊付きに剥がれた粘土が付着している。復原底径9.6cm。10は黒牟田窯の香立である。外面上位に横位凹線9条と中位に縦位の凹線が施されている。復原口径9.4cm。焼成良好で、胎土は暗赤褐色を呈する。外全面と内面上位に暗赤褐色～黒褐色の釉薬がかけられている。11は古伊万里染付皿で、復原口径12.5cmを測る。胎土は白色を呈し、全面に薄白色の釉薬がかけられている。染付の横線は暗緑灰色、文様は暗青灰色であり、文様はややくずれているようである。12は古伊万里染付湯呑である。復原口径8.0cm、高さ5.6cm、底径4.3cmを測る。胎土は灰白色を呈し、全面に薄青灰色の釉薬がかけられている。染付は暗青灰色で竹文を描いている。豊付きに重ね焼きの痕がみられる。13も古伊万里染付湯呑である。復原底径3.8cm。胎土は白色を呈し、全面に薄白色的釉薬がかけられている。染付は暗青色で濃淡があり、文様は不明である。14は嬉野焼の碗で、高台は削り出しである。胎土は浅黄灰色を呈し、高台内外面を除く他の内外に灰釉がかけられている。底径4.8cm。

15は直径25mm、縁の厚さ1mmを測る寛永通宝で、8号トレンチから出土した。

(4) 清原地区調査のまとめ

清原台地における遺跡確認調査は菊水町教育委員会による昭和50年度調査に次いで今回が2度目であった。今回の調査所見も50年度調査所見との比較および再評価として述べなければならない。

出土遺物では、縄文時代晩期までは確実に遡れようが、あるいは京塚(伝)周辺3～5号トレンチ出土の底部は中期に比定し得る可能性も考えられる。これは、当台地北方、江田川の対岸に所在する若園貝塚が中期後葉～後期を主体とする点と考え合わせられよう。弥生時代遺物は今回は皆無であったが、50年度調査では後期における単期間の居住を確認されている。

古墳時代においては当台地は確実に墓域化(聖地化)していた。前期末に比定される複合口縁壺を出土した姫塚に続き、京塚(伝)古墳の舟形石棺・大久保の家形石棺(俗称オクボサンの墓)・清水原の家形石棺など石棺の使用が顕著である。さらに船山古墳の妻入の横口式家形石棺や塚坊主古墳の横穴式石室の平入の横口式家形石棺状を呈す石屋形などへの変遷が窺える。

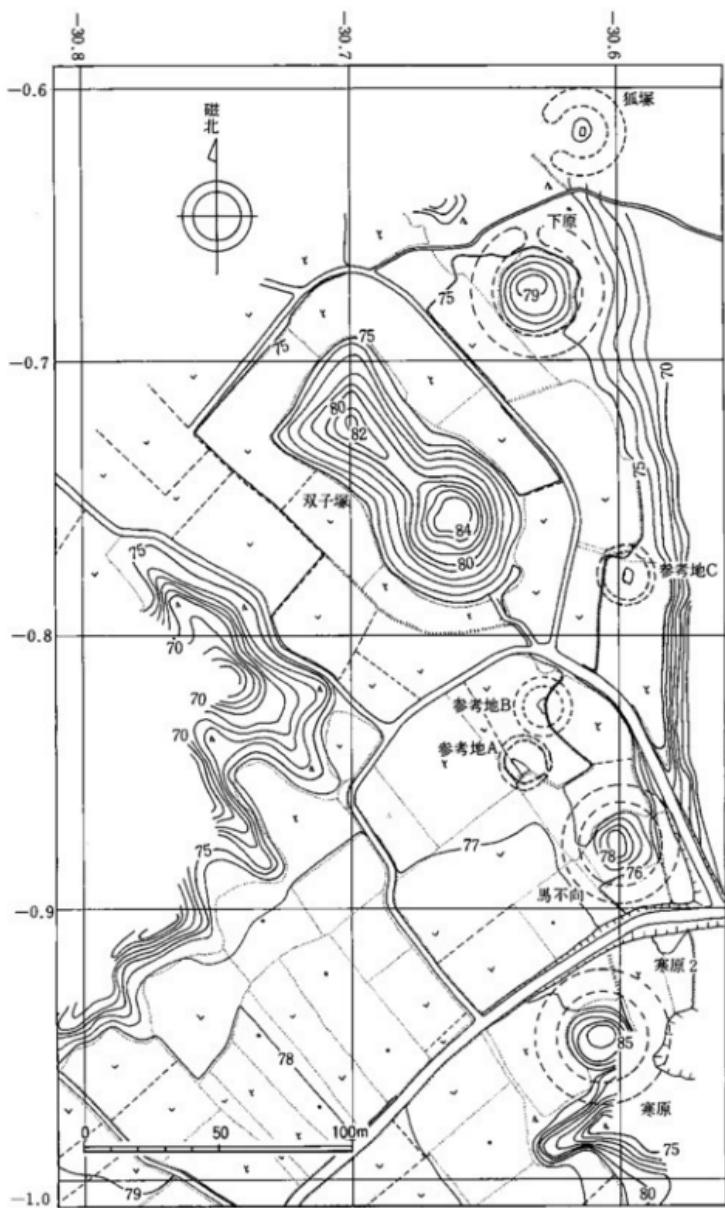
当台地の墓域としての意識が大きく崩壊したのは中世期であり、墳丘の削平も行なったと考

えられる。以後近世をも通じて居住地として生活が営なまれている。

今回調査した虚空蔵塚・塚坊主両古墳について考えてみる。50年度調査の所見では、出土須恵器の形式からみた時間的流れは船山→塚坊主→虚空蔵塚とされながらも、出土埴輪では虚空蔵塚→船山→塚坊主とされ、虚空蔵・塚坊主の相対関係が須恵器・埴輪では逆になり、問題点が提起されていた。^注今回の調査でも埴輪は虚空蔵→塚坊主の相対関係を示した。ところが今回虚空蔵塚古墳から、塚坊主古墳出土の須恵器と同時期のものが出土しており、虚空蔵塚古墳の上限を最低塚坊主古墳の時期まで遡らせ得る。これに築造時あるいは初葬時に埋納されたことを前提とする出土埴輪を考え合わせるならば、虚空蔵塚古墳は塚坊主古墳より古い時期の築造とすることも可能かと考える。尚、船山古墳・京塚(伝)古墳を加えた4古墳を考えると、虚空蔵塚古墳出土の埴輪は京塚・船山両古墳の間に位置付けられることが50年度調査で確認されている。虚空蔵塚古墳の埋葬施設は不明であるが、京塚(伝)古墳は舟形石棺、船山古墳は横口式家形石棺、塚坊主古墳は装飾を有する横穴式石室であり、京塚・船山両古墳の間に位置付けられる虚空蔵塚古墳の埋葬施設は舟形・家形何れかの石棺が考えられる。更に石棺の出土遺物では、現在のところ舟形石棺に須恵器が伴なった例はなく、その点からすると須恵器を有する虚空蔵塚古墳の埋葬施設は家形石棺の可能性が強いであろう。

(森山)

注 「船山」菊水町教育委員会文化財調査報告書第Ⅰ集(1976、熊本県玉名郡菊水町教育委員会)では、埴輪出土地4ヶ所の各々の時期順を、京塚→船山古墳→塚坊主古墳→虚空蔵塚古墳とされていたが、「清原古墳群周辺調査概要」玉名郡菊水町教育委員会(『江田船山古墳』所収1980)では、京塚→虚空蔵塚古墳→船山古墳→塚坊主古墳と訂正されている。



第19図 岩原地区古墳分布図

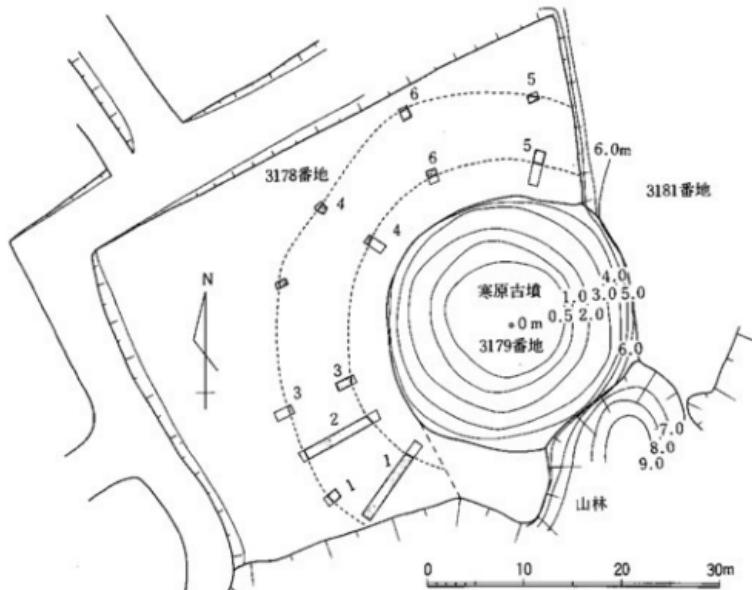
3 岩原地区の調査(第19図)

岩原地区には現在墳丘の確認されるものに、双子塚、寒原古墳、馬不向古墳、下原古墳をはじめ、寒原2号墳、狐塚がある。さらに古墳の残丘とみられるものが馬不向古墳の北側に二基ある。ここでは便宜的に馬不向古墳の北西約40mの位置するものを「古墳参考地A」とし、同じく北北西約50mに位置するものを「古墳参考地B」として取扱うこととした。このほか古墳の残丘とみられるものが、古墳参考地Bの北東約50mの地点にある。この地点をここでは、「古墳参考地C」として取扱った。

注 岩原古墳についての総括的な資料報告として、『熊本史学』第十二号に田辺哲夫氏「岩原古墳」がある。

(1) 寒原古墳と寒原2号墳(第20・26図)

寒原古墳は国指定史跡「岩原古墳」のうち最も南に位置する古墳である。寒原古墳の現況についてもう少し説明すれば、墳丘は寒原3179番地に所在し、北、東、西の三面は畠である。このうち東側の畠地は段落ちとなり、北側の畠との比高差は約1mである。南側は山林で墳丘裾まで谷が入り、丁度墳丘の東南の畠地の境界付近が谷頭となっている。墳頂は平坦で、周りは急斜面をなしている。墳形はほぼ円形で直径約27m、畠との比高差は西側で4.2m、東側の畠と



第20図 寒原古墳平面図

Ⅲ 調査

の比高差は6.2mであった。また、墳丘には葺石が散見される。

周溝の確認調査にあたり、墳丘西側の1・2号トレンチにおいて周溝幅を確かめ、遂次時計まわりに西から北へ発掘を進めた。調査にあたり、北側の畑はハウス園芸としての施設が並んでいたので、耕作者の了解を得た上で可能な地点を発掘した。

1号トレンチ 幅1m、長さ9.5mを掘った。ここではI層が耕土で深さ約20cm、暗褐色の砂礫を含んだ火山灰である。耕土の下にI-1層は層中に砂礫を含んだ火山灰で、この層は或時点に攪乱を受けた層である。土色は暗褐色で耕土に比べいく分粘質の明るい色調である。I-1層は墳丘側は浅く、周溝の掘込みの肩あたりで層厚25cmである。このトレンチを外側へむかって9.5m延長したが、周溝の外側の掘込みの検出は出来なかった。(周溝の内側掘込みより7mあたりで、I-1層の層厚約60cm)。周溝は地山の粘質土を掘込んでつくられ、周溝中の土色は黒褐色であった。また溝中には葺石とみられる転石が混入していた。

周溝の外側の掘込みは、1号トレンチの延長範囲で確かめられなかった。そこで1号トレンチの北約5mのあたりに、1×1.8mのサブトレンチを入れた。ここでは地表より65cm(I-1層50cm)のあたりに周溝の掘込み線が検出された。

2号トレンチは1号トレンチの北約5mのあたりに、幅1m長さ9.5mの範囲を発掘した。ここでの土層の状態は1号トレンチとほぼ同じである。即ち、I層20cm前後の層厚で、内側の周溝落ち込みはI-1層下約20cm(地表から約40cm)で検出された。ちなみに、地表から周溝外縁の肩までの深さは36cmであった。2号トレンチで確認された周溝幅は7.4m、他の部位よりも広めであった。

3号トレンチは2号トレンチの北約5m離れて、周溝肩部の予想される地点を選んで内側と外側にそれぞれ1×2mのトレンチを入れた。内側の周溝肩部は、墳裾より4.5m離れ(トレンチ東端より約60cmの地点)た地点の地表から22cmの深さに検出された。また外側の周溝肩部は、内側の肩部より約7mの地点に検出された。周溝検出の状況は2号トレンチの外側と似ていて、I層(耕土深さ15cm)の下に約10cmの厚さの周溝埋土と同質のII層がのっていた。内外の周溝肩部の線はいづれも、墳丘を中心にゆるい弧線を描いていた。

4号トレンチは3号トレンチの北東約15m離れた地点に、内外の周溝肩部検出のためのトレンチを入れた。内側の肩部は地表からの深さ18cm、I-1層の下に地山の粘質土を掘込まれていた。外側の周溝肩部は地表から47cm(I-1層の下に更に一層あり、II層の深さ20cm)の部位の地山を掘込んでいた。4号トレンチで検出された周溝は、内側が墳裾より2.4mの地点で、周溝幅は6.3mと狭かった。

5号トレンチは寒原古墳をとりまく畑(この際、東側の一段低い畑3181番を除く)の東端近くに設定した。トレンチは他のトレンチと同様内側と外側に各一箇所を発掘した。内側の周溝の肩部はI層(耕土深さ20cm)の下に深さ50cmの客土(I-1層)があり、地表下に約70cmの

ところで地山を掘込んでいた。またここでの周溝検出の部位は墳裾より3.6m地点であった。地表から55cm下のⅠ-1層の下に検出することが出来た。

6号トレンチは4号トレンチと5号トレンチの間に設定した。内外周溝肩部検出のため2個所を発掘した。ここでの周溝肩部検出の部位は地表下45cmのⅠ-1層下で、墳裾より4.4mの地点であった。周溝外側の肩部は内側肩部より7.4m離れた地点で、地表下38cmのところに検出された。ここではⅠ層下にⅡ層があり、周溝内を埋めているⅡ層の土の一部が周溝の外側まで延びていた。

3号トレンチと4号トレンチの間に、発掘可能な地点を選んで一個所発掘した。ここでは外側の周溝肩部を検出することが出来た。周溝検出にあたり、墳丘東側の畑(3181番地)については、里芋等が植付けられ発掘することが出来なかった。しかしこれまで発掘した畑(3178番地)とは比高差が約1mあり、すでに周溝が削平されていることが考えられる。南側は山林で、谷が深く弯入しており周溝の存在は考えられなかった。

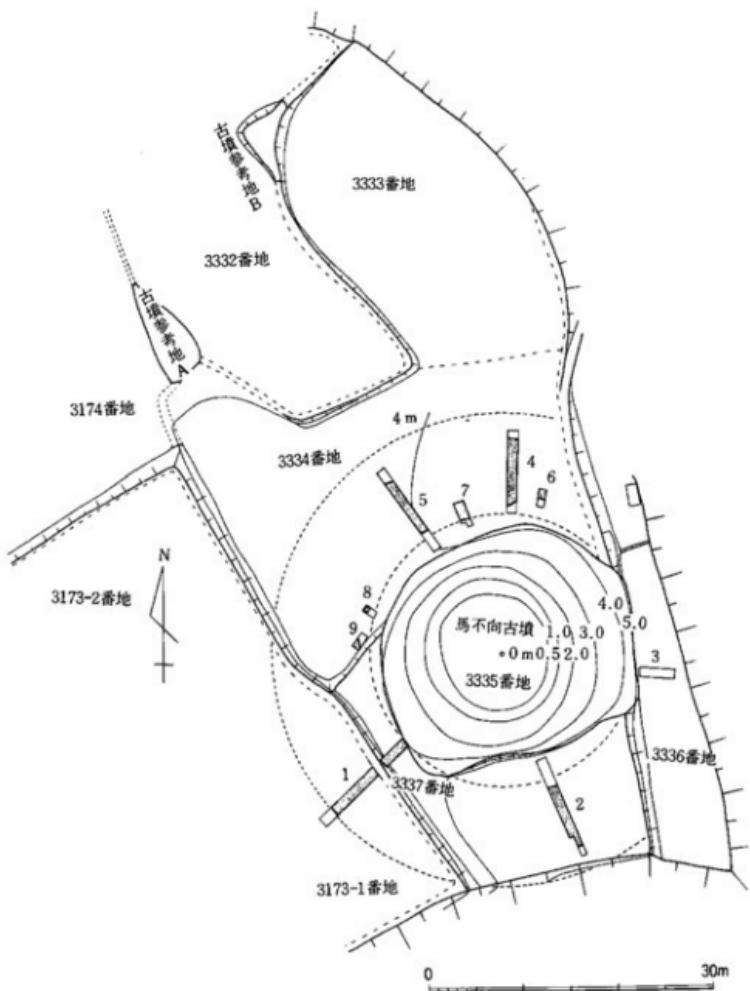
寒原古墳の周溝は現存する墳裾の4m前後外側に内側の肩部が検出された。周溝幅については埋土の状態についても検討を要する問題であるが、7m前後であった。4号トレンチの部位で周溝幅が狭くなっているのは、4号トレンチと6号トレンチの間あたりに周溝のブリッジがくることも予想される。

寒原2号墳 この古墳はもともと無名の墳丘であった。昭和40年春、この墳丘の北半を削って農道が建設され、発見後の処置として破壊された石棺等が調査された。この時^{注1}「寒原2号墳」と命名された。古墳は寒原古墳の東北20m余の地点に位置し、農道(堀切り道)を挟んだ北側には馬不向古墳がある。墳丘は寒原3180番地で、一辺約10mの三角形の地形である。寒原2号墳は昭和40年道路工事の際墳丘の北半を失ない、主体部の家形石棺を露出している。この時の調査で石棺は長軸を東西にとっていたことが判明している。この様に墳丘の北半は削平され、南半分を残すのみであるが、南東部墳裾のあたりから急落しており、周溝のある可能性のある地域は墳丘の西南部に限られていた。ちなみに墳頂と墳裾との比高差は、西南部で1.5m弱であった。

寒原2号墳の周溝検出は墳丘西南部の寒原3181番地に的をしばり、可能な地点の発掘を実施した。

寒原2号墳の西、道路沿いの東西約20m、南北約9mの地域の数地点を撰び総はぎを実施した。その結果、現在の耕土の下にまもなく地山の粘質土があらわれた。このことはすでに報告された墳丘の土層断面図からも推察出来るが、寒原古墳と寒原2号墳の間の畑は大きく削平を受けていることが判明した。どの時点に削平されたか明らかでないが、土層の層序から判断して過去に少なくとも30~40cm削られたものと考えられる。この畑から寒原2号墳の周溝は検出されなかったが、他の調査例からして、元々周溝が存在しなかったとは言いきれない。

注1・2 隈昭志 杉村彰一「岩原古墳群をめぐる文化財問題」『熊本史学』第二九号 昭和40年



第21図 馬不向古墳及び周辺平面図

(2) 馬不向古墳 (第21・26・27図)

馬不向古墳は堀切り道を挟んで南に寒原古墳、北側に馬不向古墳と並んでいる。この間、距離にして約70m離れている。墳丘は馬不向3335番地にあり、墳丘の部分は国指定史跡となっている。墳形は不正円形で、東西27m、南北23m位である。また周囲の畠と墳頂との比高差は北側で4m、南側2号トレンチ附近で4.2m、東側3号トレンチ付近で5.6m、西側1号トレンチ付近で3mである。墳丘の周辺について説明を加えれば、北側(3334番地)は植栽4~5年目の梅林で、比較的平坦な畠地である。南側から続いた細長い畠(3337番地)が周溝状にめぐっている。南側の畠(3337番地)はサルスベリなどの樹木が植えられているが現在荒地である。東側は約1mの段落ちで、クヌギの幼木が植えられていた。この細長い畠(3336番地)の端は道路の法面である。

1号トレンチは墳丘の西に向けて設定した。発掘の過程で周溝は3337番地から畦をこえ、隣接する3373番地におよんでいることが知れた。3337番地では確認のため周溝底まで発掘したが、周溝埋土(Ⅲ層)中に葺石の転石のほかにハニワ等は出土しなかった。

1号トレンチの層序は、Ⅰ層表土(耕土)で層中にビニール片や白粘土が混入していた。3373番地では耕土の下が填圧され、その面にそって白粘土がひろがっていた。これは圃場整備のとき均され漏水防止のための鎮圧とみられる。Ⅰ層の層厚は20~30cmであった。Ⅱ層は黄褐色火山土で、層中に木炭片や砂礫・粘土を含んでいた。この層は周溝中央部で厚くレンズ状にたれ下がり、周溝外まで延びていた。Ⅲ層の層厚15~35cmである。Ⅲ層は赤褐色の粘質土で層中に木炭片が混入していた。この層は周溝の埋土とみられ、葺石の一部が転落混入していた。

1号トレンチにおける土層観察から、周溝は現在の墳丘裾からそのまま落ちており、約10.5mの周溝幅があった。

2号トレンチは墳丘の南に設定した。当初1×9mのトレンチを入れ周溝の一部溝底まで発掘探索にあたったが、周溝の外側の肩口が発見出来なかつたので約2m南へ延長した。このトレンチでの層序はⅠ層表土、層厚約20cm。Ⅱ層は黄褐色火山灰で、層中に粘土粒が斑点となって混入していた。この層は計測部位により厚薄あり、8~20cmであった。Ⅲ層は黒色の火山灰土で、下底部には粘土粒が混入した。また層中には径20~30cmの不正形の礫数個が埋没しており、墳丘からの葺石の転石と考えられた。

2号トレンチにおける周溝は、墳裾より3m外側に内側の掘込みが発見され、これより7.5m(溝幅)のあたりに外側の掘込みがあった。また現地表より溝底までの深さは70cmで(肩部の落込みから約20cm)あった。

3号トレンチは墳丘の東に向けて設定した。3336番地の畠地(荒地)が試掘地点で、隣接の畠(3337番村)より1m余り低かった。トレンチは1×4m、墳裾より東に長く延ばしたがここでは周溝の検出はされなかった。土層は2号トレンチと同じく、Ⅰ・Ⅱ層と続き、地表から

約30cmで母岩の花崗岩があらわれた。

馬不向古墳の北側は梅林（3334番地）であるが、耕作者の了解を得て樹間をぬって4・5号トレンチを入れた。この際、1～3号トレンチと同様に墳丘中心部に向かって放射状にトレンチを設定した。4・5号トレンチの他に周溝確認のため、3・4号トレンチおよび4・5号トレンチおよび4・5号トレンチの間に一地点5・1号トレンチの間の二地点を選んで試掘した。

4号トレンチは墳丘の北へ南北方向に長く、幅1mにして長さ9m余りを発掘した。このトレンチでの土層はⅠ層が耕土で層厚約13cm、Ⅱ層は暗褐色土で墳丘よりのところに粘土がのっていた。層中に近世陶器が混入しており、近世以降に攪乱を受けた土層と判明した。ちなみにⅡ層の層厚は63cmであった。Ⅲ層が周溝中の埋土であるが、この土層の色調は黒褐色であった。4号トレンチで確認された周溝は、墳裾より1.5mのあたりに内側の落ち込みがあり、これより6.8m（周溝幅）外側にもう一つの落ち込みを確認した。

5号トレンチは4号トレンチの西側に、幅1m、長さ10mにわたって発掘した。このトレンチでは耕土（層厚約18cm）を取除くと地山の粘質土があらわれ、周溝も比較的容易に発見出来た。他のトレンチにみられたⅡ層を欠除しており、耕土下に直ちに地山を掘込んだ黒褐色周溝埋土を検出した。Ⅲ層の中に土器細片の混入がみられたが、Ⅲ層上面で発掘を止めたので器形器種の知れる遺物の発見はなかった。5号トレンチにおける周溝は墳裾より2.7mのところに内側の落ち込みが、更にこの落ち込みより6.6m（周溝幅）のところに外側の周溝の肩部が検出された。

（3）古墳参考地A・B・C周辺（第22・23・27・28図）

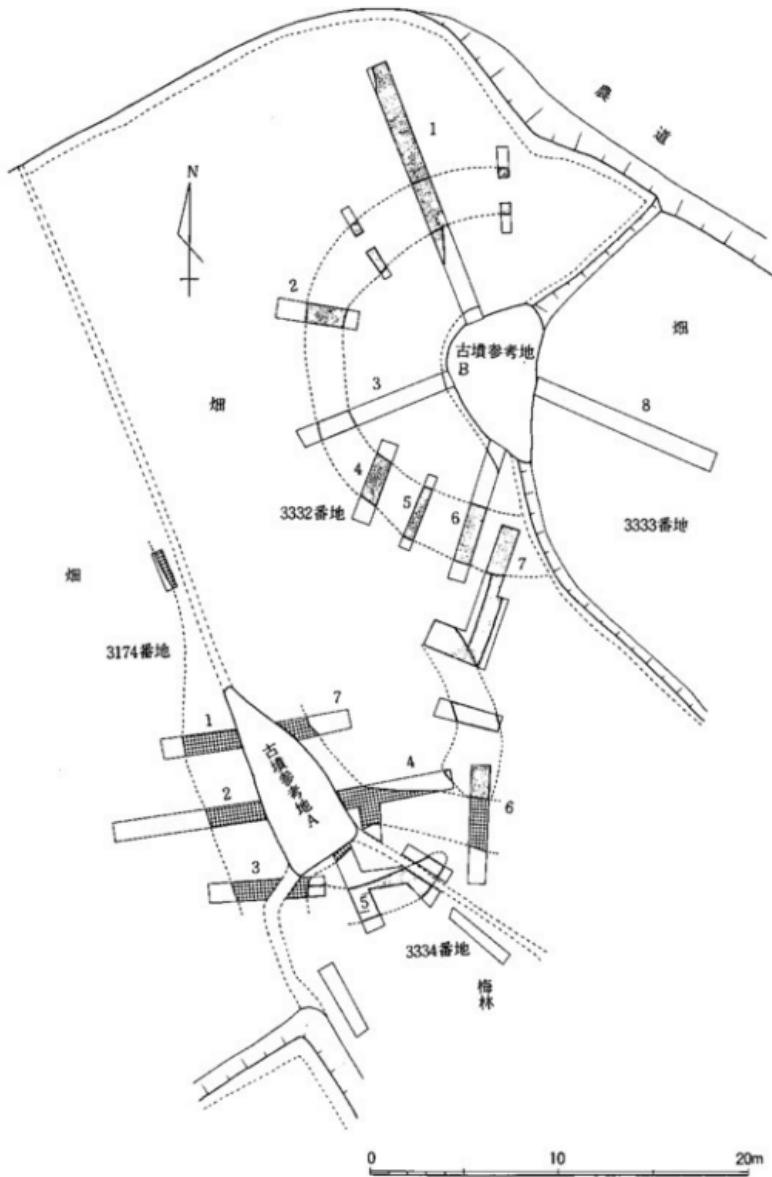
馬不向古墳の北側に二地点、双子塚の後円部の東南に一地点、合計三地点に古墳の残丘とみられるものがある。ここでは便宜的に古墳参考地として取上げ、南からA・B・Cと呼ぶことにした。

古墳参考地A（第22・27図）

馬不向古墳の北西約40m、地番にして3332、3174、3334の境界にそって小さな塚状の盛土（残丘）がある。盛土の形は三角形に近く、南北11m、東西4m余りで、北側の一端が鋭角的に尖っている。この盛土は、周囲の畑より一段と高く、比高差は1m余りである。また盛土中に古墳の構築材とみられるような石材は発見出来なかった。なお付言すれば、この塚状の盛土より西は先年圃場整備により区画整理されており、その際残丘上にハゼの木があり伐採したとのことで、今その根株を残している。

古墳参考地Aの周溝確認にあたり、周辺畑地の耕作者の理解をもとめ、作付計画にあわせる形で調査を進めた。調査にあたり、先づ西側の3174番地の畑地に対して東西方向の三つのトレンチを入れた。即ち、1～3号トレンチがそれである。

1号トレンチは盛土の北端近く、盛土の裾より西へ向けて4m程延ばした。層厚約16cmの耕作土（Ⅰ層）を取除く。盛土の裾より西へ2.4mのあたりに、地山（赤褐色粘土）を掘込んだ南北



第22図 古墳参考地A・B周辺平面図

の線があらわれる。掘込みの中の土は暗褐色土で、層中に土器細片・木炭片が散見されたが、埋土自体比較的新らしいものとみられた。(I-1層、2号トレンチでこのことが検証される)。

2号トレンチは1号トレンチの南に4m離れた地点に設定した。トレンチは残丘裾より西へ8m延ばし、精査にあたった。I層(耕土)約18cmの層厚、I-1層はI号トレンチと同様で残丘裾より2.8mのあたりに地山を掘込んでいた。ここでは、I-1層の埋没状況・遺構の性格等を調べるために下まで発掘した。発掘の結果、I-1層は残丘裾より2.8mあたりから東に向けて緩傾斜し、トレンチの東端で層厚50cm(地表から71cm)となり残丘下に入りこんでいる。したがって、古墳の残丘とみられた盛土は古墳の一部でなく、比較的新しい盛土という疑いが出てきた(この頃に関して後述)。

3号トレンチは2号トレンチの南4mの地点に設定した。当初、盛土の裾あたりの畦畔から西へ3mを発掘したが、調査の進行にしたがい畦畔をこえ東へ1.5m延長した。ここで土層の状態は1・2号トレンチとほぼ同様で、トレンチの東端(北側)から2.4mの地点にI-1層の掘込みの線があらわれた。この掘込みの線は1・2号トレンチの掘込みの線に連るものとみられる。

3号トレンチの東への延長分については、I-1層の反対側(東)の掘込みの線があらわれた。この延長分について、東半分には一部に黒色土のあることが判った。黒色土はトレンチの縦方向に二分した形で南半にあらわれ、埋土の色調・組成からして古墳時代以前の遺構の埋土とみることが出来る。

4号トレンチは1号トレンチの延長線上、盛土の反対側に設定した。トレンチは盛土の裾より東へ約3.5m発掘した。このトレンチの耕土を取り去ったあと土層は1号トレンチと同様で、I-1層の掘込みが盛土の裾より1.5mのあたりで発見された。この掘込み線は、1号トレンチの掘込み線に相対するものと考えられる。

5号トレンチは4号トレンチ同様、2号トレンチの延長線上に設定した。ここでは耕土下に斑点まじりの土を混入したI-1層がほぼ全面を覆っていたが、トレンチ北側で盛土の裾より1.5mのあたりで落込んでいた。この落ち込みの線はトレンチを斜断する形で東南に延びていた。またトレンチの東北隅には一部黒土層があらわれた。この黒土層は遺構の埋没土とみられる。

6号トレンチは1~5号トレンチと違い、南北に長く1×6.5mのトレンチを盛土の東約15mの地点に設定した。ここでも耕土(I層の層厚約18cm)下に暗褐色粘土粒の斑点の混るI-1層がある。この層は幅2.6mで東西に伸びる。北側の掘込み線は、状況から5号トレンチで発見された黒土層と同一と考えられる。

7号トレンチは3号トレンチと6号トレンチの間に、盛土の裾より南へ4.5m発掘した。このトレンチでは盛土の裾より約40cmの間にI-1層があらわれ、掘込み線が東西に延びていた。ここでは、トレンチの南よりのところに黒土層があらわれた。黒土層は一部を発掘し、遺構の状態を確めた。遺構は幅170~178cmの幅で東西に延びており、中央部で深さ18cm、断面U字形の溝状

をしていた。

古墳参考地A地点では遺構とみられるものに黒土層の埋没せるもの（断面溝状）、それにI-1層からの落込みが検出された。そこでこれらの遺構の延長を追って、数地点にトレンチを入れ確認につとめた。ここでその結果について説明加えたい。

黒土の溝状遺構は5、6号のトレンチの間をブリッジとして残した古墳周溝とみることも可能である。

もう一つの遺構とみられるI-1層からの落ち込みは、古墳参考地Aで交会する形で三方に分かれている。現在、ほぼその線に沿って畦畔と盛土がのこっている。2号トレンチと5号トレンチで底部まで掘り上げたが、この遺構の性格（道路の可能性あり）は詳かでない。いづれにしても、埋土の状態から判断して近世以降の埋没とみられる。したがって、古墳参考地Aとした盛土はこの土層（I-1層）の上にのっているところから、比較的新しい堆土とみられる。

古墳の周溝状にめぐる溝状遺構と盛土が、あたかも古墳主体部に相当するところにあるが、仮にこの位置に古墳があって、それが撤去され今の状態になるに至った経過について、今後盛土そのものの発掘も含め、さらに調査をする必要がある。

古墳参考地B（第22・28図）

古墳参考地Aの北東約12mの地点に古墳参考地Bがある。岩原3332番地と同じく3333番地に一辺6mで90°の夾角をつくる直角三角形状の盛土（残丘）がある。盛土の高さは西側の畠地では、比高差が約1.2m、東側の畠が比高差が約2mとなっている。発掘は調査の推移にしたが、逐次1号トレンチから溝状遺構のひろがりを追って、古墳残丘（以下単に残丘）とみられる盛土を中心にして放射状に、トレンチの数をふやしていく。

1号トレンチは残丘より北へ向けて幅1m、長さ14.5mのトレンチを設定した。耕土（I層）約18cmの層厚を取り除き、遺構の確認につとめた。部分的に新しい掘込みがあったが、残丘より5m北に寄ったあたりに、地山から掘下げた黒土層があらわれ、トレンチ北側の大部分のトレンチを覆っていた。この黒土層は遺構の埋没土に相違ないが、ただちに古墳周溝とみるには難点があった。また残丘掘より35cmの部位に、残丘側に向けて、掘込みがあるが、これは、埋土の色調等から比較的新しい（近世？）ものとみられる。

2号トレンチは1号トレンチの西7～8mのあたりに設定、1×4.5mの範囲の耕土を発掘した。ここでは予想が的中し、南北方向に延びる幅2.05mの黒土層があらわれた。両側は地山の粘質土を掘下げていた。

3号トレンチは2号トレンチの発掘に先がけて、1号トレンチと併行して残丘より西に向けて発掘した。幅1m、長さ8.5mの範囲の耕土を発掘し遺構の確認につとめた。このトレンチでの土層は、I層耕土、層厚約13cm。この下に一度擾乱を受けたI-1層がくる。この層はトレンチの東になるにしたがって次第に厚くなり、残丘の中に入っている。ここでの黒土層は、残

Ⅲ 調査

丘裾（トレント東端）より5.7mのあたりでI-1層下にあらわれ溝幅約1.8m、溝は地山を掘込んでいた。

4号トレント、5号トレントは3号トレントの南側に設定した。それぞれ幅2.4m、2.9mの溝を検出した。土層の堆積状態は2号トレントと似ているが、5号トレントではI-1層がなかった。ここでの顕著な事実として、黒土層から円筒ハニワの破片が出土したことである。5号トレントについては狭い範囲ではあるが溝を発掘した。

5号トレントの溝は角度の大きいV字形をしていて深さ55cm（地表から66cm）であった。溝の上面は黒色土がレンズ状にひろがり、中央部で厚く（約10cm）、両端で薄くなっていた。黒色土の下は暗褐色の火山灰土で界面は不鮮明であった。この溝中に点々とハニワ破片が混入していたことは既に述べたとおりである。

6号トレントは1・3号トレントについて発掘をはじめた。発掘にあたり残丘裾より南にむけ1×7.5mのトレントを設定した。このトレントでは耕土下にI-1層、統いて周溝とみられる黒土層があった。またI-1層は残丘近くで漸次落ち込んでおり、状況から1・3号トレントに似ていた。周溝は粘質土の地山に掘込まれており、溝中にハニワ片が散見された。溝幅はこのトレントで約3mであった。

7号トレントは6号トレントと平行して、その東側に設定した。このトレントではI-1層下に黒～黒褐色土があらわれた。この土層は造構面とみられ、さらに、造構のひろがりの確認のためトレントの南側を西と東へそれぞれ拡大した。ここで検出された造構として南北方向に幅90～95cm溝がある。この溝は北側で周溝と重なり、南側は他の周溝？と重複していた。北側に検出された周溝は6号トレント検出の周溝に連なるものとみられる。ここでは外側の掘込み線は土手のため確認出来なかった。7号トレントの西側拡大区に周溝とみられる造構があらわれた。その状況から古墳参考地Aのものとみられ、確認のため古墳参考地Aの6号トレントとの間に東西方向のトレントを新たに設定した。ここでも黒土層があらわれ、この推測を裏付けた。

8号トレントは残丘より東（岩原3333番地）に向けて1×10m余りトレントで、周溝検出のため比較的長めに設定した。トレントを設定した畑は隣接の畑（岩原3332番地）より比高差にして約70cm低いため、造構（溝）の消滅が懸念された。発掘の結果、案に違わず耕土下はすべて地山での造構の痕跡すら留めていなかった。

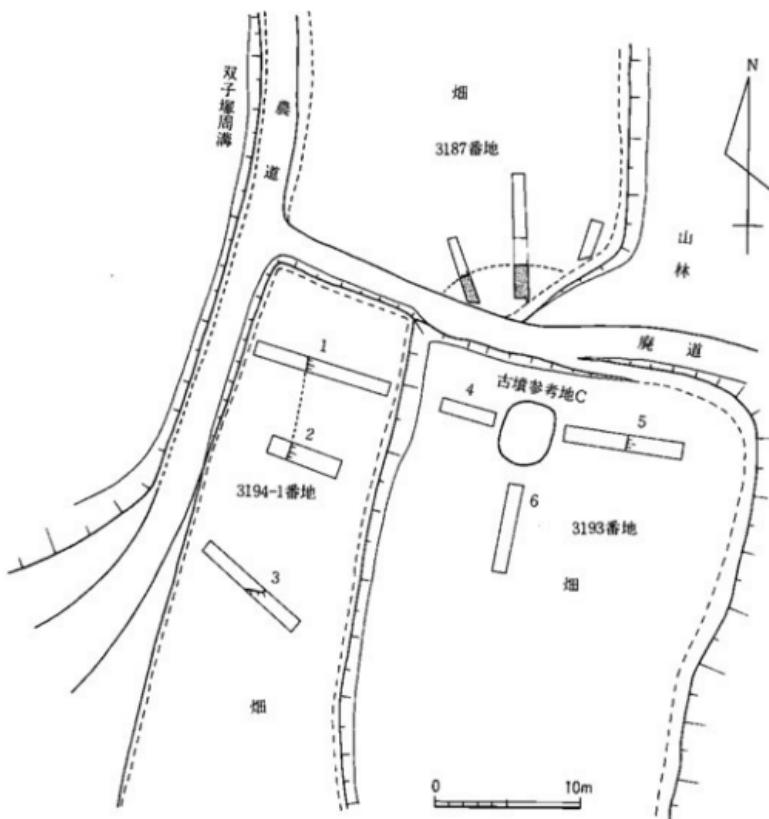
古墳参考地Bでは1～8号の各トレントをあけ、古墳周溝の追跡をおこなった。さらに周溝のめぐる状態をよりくわしく知るため、1号トレントの両側に4地点に穴を開けた。調査の結果、残丘を中心にして溝の内径約31mの周溝がめぐっていることが確実になった。東側の一段低くなった畑で周溝が発見出来なかったのは、ある時期に削り去られたのであろう。残丘西および北側で周溝が検出されたが4.8～6.2mの溝幅がそのまま周溝幅とはみられない。土層断面の状態から、ここでもいく分割り取られている疑いがある。そうした場合周溝の内径は31mより

小さい類値となろう。古墳参考地Bを中心めぐる溝が古墳周溝とみられるのに、溝中の出土遺物がある。遺物はいづれも円筒ハニワの破片で、その主なものは第30図に図示したとおりである。

古墳参考地Bとした残丘について一言ふれておきたい。1・3・6号の各トレンチにおいてI-1層からの落込みが確認されている。その状況から、この残丘は古墳参考地Aと同じく比較的新しい堆積ではなかろうか。残丘が周溝の中心、あたかも古墳主体部の在る地点に占地するに至った経緯については、古墳周溝検出と別個の問題として取組必要がある。

古墳参考地C（第21・26図）

双子塚後円部東側に古墳残欠とみられ小盛土があり、盛土の周りには古墳の構築材とみられ



第23図 古墳参考地C周辺図

Ⅳ 調査

る石が露出している。この場所（岩原3193番地）は3.5×4.5mの盛土で、周囲の畠より1mばかり盛上がっていた。調査はこの盛土（残丘）を中心にして、周溝確認のため逐次トレンチを設定した。

1～3号トレンチ：1号トレンチを残丘の西側、一段上がった3194番地の畠に設定した。トレンチは東西に長く、畠の幅一ぱいの9.5mの範囲を発掘した。層厚約20cmの耕土（Ⅰ層）を取除くとトレンチの東端から5.5mのところに掘込みの線があらわれた。この掘込線より西はすべて黄褐色粘質土でいわゆる地山である。掘込線より東はⅡ・Ⅲの二層に分れ、トレンチの東端では地山の深さは105cmに達する。Ⅱ層は暗褐色土層、Ⅲ層は暗黒褐色土層で東に行くにしたがい層が厚くなる。地山にいくつかの小ピットがあり、Ⅲ層中には部分的に粘土が混入していた。

出土遺物としてⅢ層下部からハニワ片一個が発見された。

1号トレンチにおける地山の傾斜、掘込の線をどう見るか（若しかて双子塚の周溝堤では）、多少の疑問を含み調査を進めた。1号トレンチと同方向に設定した2・3号トレンチでも同様な掘込み線があらわれた。Ⅱ層の暗褐色土中には土器片が混入していたが、ここではⅢ層の暗黒褐色土は出現しなかった。

この1～3号トレンチにあらわれた層の変化、掘込み線が何を意味するか、果して双子塚の周溝堤でみてよいか明確にし得ないまま調査をすすめた。

4号トレンチは1号トレンチと同一方向に設定した。発掘地点の畠は1号トレンチより約1.3mの段落ちとなっている。このトレンチでは耕土約16cmを除けば直ちに地山のオレンジ色の母岩で、遺構、周溝の痕跡すらなかった。

5号トレンチは残丘をはさんで4号トレンチの反対側に設定した。トレンチの長さ8m、この間の土層の状態をしらべた。ここではトレンチの西端から4.4mのところ（残丘裾より5.2m）に土層の落込み線があらわれた。耕土（土層）の層厚14cm、暗褐色粘質土（Ⅱ層）の層厚15cm、以下Ⅲ層の黒褐色が約40cmある。当初、落ち込みの線が周溝の掘込みではないかとの疑いをもつたが埋土の状況からして地形の自然傾斜を見るに至った。

6号トレンチは残丘より南に約6mのトレンチを設定した。ここでは4号トレンチと同じく、耕土下は地山の盤であった。

7、8、9の各号トレンチは残丘の北側の岩原2288番地に設定した。作物の人參の収穫を待って、7号から8・9号と試掘した。

7号トレンチは残丘の北側の畠（岩原2287番地）に長さ8.5mのトレンチを南北に入れた。このトレンチ内における土層はⅠ層耕土で、層厚約17cmである。Ⅱ層は暗褐色土で層厚約15cmである。周溝はⅡ層下端より地山を掘込んでつくられているが、トレンチ南端は耕土下のⅠ-1層により切られている。そこで、周溝幅はトレンチの南端より40cm位外に延びそうである。溝中の土層は上面に黒褐色土が凸レンズ状（中央部の厚さ13cm）の堆積をしていて、状態は古墳

参考地Bにおける5号トレンチの場合と似ていた。この黒褐色土の下位は暗褐色土で、層中に径20cm位の礫数個が発見された。この礫は他の古墳の周溝にみられる様に、墳丘の葺石の転落したものとも考えられよう。溝の両端はゆるくカーブするが、溝底までの深さは地表から75cmであった。

8、9号トレンチは7号トレンチの両側に、残丘を中心にして放射状に設定した。9号トレンチは畠の端に近く、地表下50~60cm掘下げたが畠の客土であった。8号トレンチではI-1層の下に溝の落ち込があらわれた。それはトレンチの南端から2mのところで、これを周溝とみた場合外側の落ち込みとみなされる。

古墳参考地Cはその残丘の部分に石材があって、一見して古墳の構築材ではないかとの疑いをもたれた。また残丘の北側の古道(廐道)に石材が集積され、当初から古墳の疑いが最も強かった。また周溝とみられる溝は残丘の北約10m離れた7・8号トレンチで検出され、溝中には葺石とみられる転石もあった。残丘の周りの畠(3193番地)で周溝が検出されないのは、地勾配による表土以下の削り取りによる事は間違いない。そのことは、4~6号トレンチにおける耕土直下に地山(盤)の出現によっても理解出来よう。

(4) 下原古墳(第24・29図)

双子塚の東側、一枚の畠を挟んで下原古墳がある。墳丘は大字岩原字下原2277番地にあり、墳丘とその周辺は山林で、樹木や笹で覆われている。

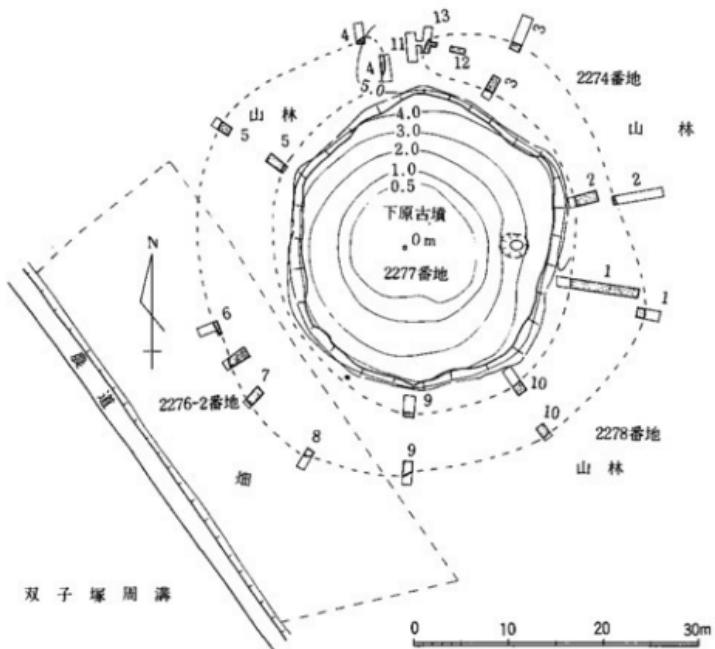
下原古墳の墳丘は『岩原古墳』の中の一つとして、国指定史跡となっている。墳丘は南北約31m、東西約28mで不正円形をしている。墳頂と墳裾との比高差は周辺地形に影響され、東側で5m余、西側で約4mであった。ここでは、周溝確認のため墳丘の中心地点から放射状に順次トレンチを入れた。トレンチ設定にあたり、発掘予定地が山林であるため、樹木をさけて必ずしも、希望する地点の発掘が出来なかった。また、時に応じ周溝の肩口検出のため内側と外側の別々に発掘した。

1号トレンチは墳丘の東側の山林中に設定した。墳裾を起点にして可能な範囲で延長し、約9mの長さを発掘した。ここではI層表土が20~30cm堆積し、地表近くに落葉が積り、場所によつては樹根がありこんでいた。周溝は墳裾より1m90cmのあたりに内側の落ち込みがあった。

1号トレンチの延長約9mの中に、周溝の外側の落ち込みが検出出来なかつたので、樹木をさけて南に約2m離れた地点を発掘した。そこではトレンチの延長部分の表土(約50cm)下に、かろうじて周溝外側の落ち込みを検出した。この外側周溝発見の位置は、墳裾より10.5mのあたりである。

2号トレンチ以下10号トレンチは、1号トレンチから始まって時計まわりと反対の方向に設定した。そこで1号トレンチの北側約10m離れた地点が2号トレンチとなる。

2号トレンチでの周溝は表土下深く埋没していた。内側の落ち込みの発見の地点は墳裾から約



第24図 下原古墳平面図

80cm離れた地点で、地表下68cmに埋れていた。外側の周溝肩口検出に一層手間どった。当初、予想される地点を選定し発掘にあたったが容易に確かめられなかった。遂次トレントを延長し、墳裾より5mの地点になりやっと発見出来た。周溝は地表68cmのところに、地山を掘込んでつくられていた。このトレントでは、周溝のほかに小ピットが二個検出された。

3号トレントは墳丘の北東部に長さ2.5m、4mのトレントを直線上に設定した。ここでの内側周溝落ち込みは墳裾より1mの地点で、地表から約50cmの地点であった。ここでは表土下部から礫とハニワ片があらわれ、周溝中には同様の遺物が多量に埋没していた。ここで発見された礫は、その大きさ（径20cm前後）からして、もともと墳丘の葺石に使用されたものとみられる。

3号トレント周溝の外側落ち込みは、墳裾より7.8mの地点に地表下7cmのところにあらわれた。ここではトレントの中から遺物は発見されなかった。

4号トレントは墳丘の北側に設定した。内側のトレントでは地表下60cmのところに周溝の落ち

込みが発見され、トレンチ内の落ち込みの状況から周溝のブリッジの位置にあたるものと推定した。外側の周溝のトレンチでは、墳裾より7mの地点に周溝の落ち込みが検出された。

5号トレンチは墳丘の西北にむけて設定した。内側周溝落ち込は、墳裾より2mのあたりにあらわれた。表土の層厚約40cmで、その下に地山を掘込んでつくられた周溝が埋没していた。外側の掘込みは墳裾より10mのところに発見され、地表下75cmのところに肩口があらわれた。トレンチ中に遺物の出土はなく、地表下20~30cmは竹根で土が浮き上がり気味であった。

6~8号トレンチは墳丘西側の西瓜畑の中を発掘した。ここでは、内側の周溝肩口は推定位が畑と山林の境界線で杉が植栽されていたので発掘することを断念した。調査中6号トレンチは一部拡大し、周溝落ち込みの行方を追跡し、また6号トレンチと7号トレンチの間に一ヶ所、周溝探索のためのトレンチをあけた。

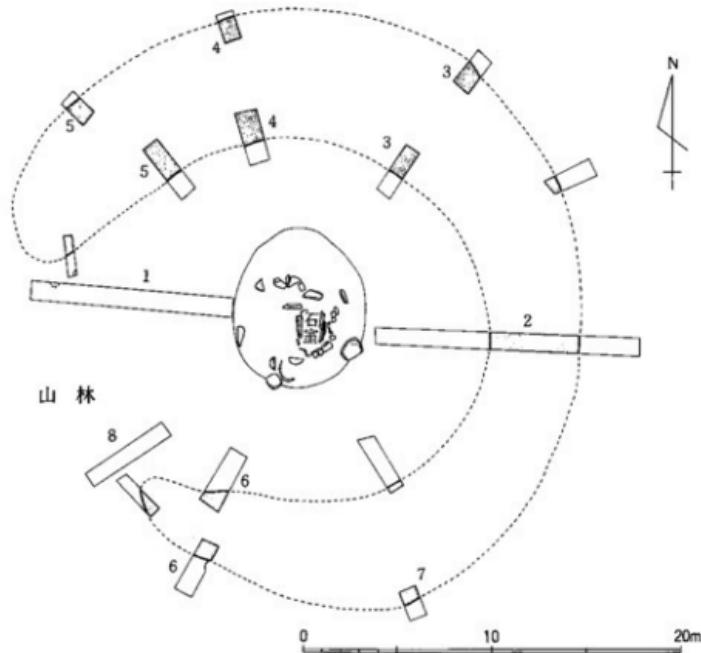
6号トレンチでは墳裾より9mのあたりに周溝外側の落ち込みが発見された。ここで層序は耕土（I層）18cm、ついでII層に暗褐色火山灰土があらわれ、層厚8cm。II層の下は地山の粘質土であるが、周溝は地山を掘下げてつくられ、中に黒色土が埋っていた。7号・8号の各トレンチの土層の状態は6号トレンチとほぼ同様であるが、周溝の出現の部位は7・8号トレンチで墳裾よりそれぞれ9.7m、9.6mの地点であった。

9号トレンチは墳丘の南に向けて設定した。ここでは周溝の内側の落ち込みが墳裾より2.4mのあたりに、外側の落ち込みが8.5mのあたりに現われた。トレンチ内における土層の層序は、周溝内側の落ち込み付近で表土（I層）20cm、暗褐色火山灰土（II層）20cm、ついで地山の粘質土があらわれた。周溝は地山を掘込んでつくられており、出土遺物はII層中ほどに円筒ハニワの小片、さらに周溝中に礫が出土した。周溝の外側掘込みのある付近でI層18cm、II層は深く59cmであった。10号トレンチは墳丘の東南に向けて設定し、内外の周溝探索のためほぼ同一延長線上を発掘した。このトレンチでの周溝の落ち込みは内側が墳裾より1.7m、外側が墳裾より8mのあたりにあらわれた。ここでは古墳築造前の浅い掘込み（地表下65cm）が発見され、墳裾より1.2mのあたりのところに造構の輪郭の一部があらわれた。周溝の内側落ち込みのところの層序は表土（I層）30cm、暗褐色火山灰土（II層）が8cm、その下に地山を掘込んでつくられた周溝があらわれた。遺物は周溝内および、周溝外のII層中に多数の礫があらわれた。これらの礫はその大きさ、形状から葺石の転石ともみられる。ここで顕著な遺物として、地表下15cm、表土中から須恵器（第30図）が発見された。この古墳ではハニワ片以外に遺物が発見されてないだけに、参考になる資料であろう。10号トレンチ外側の掘込みは墳裾より8mのあたりに発見されたが、発見の層位は地表下45cm（I層26cm、II層19cm）のII層下であった。

4号トレンチで下原古墳の周溝ブリッジの一側が発見されたので、3号トレンチと4号トレンチの間にいくつかのトレンチを設定し、反対側のブリッジの検出につとめた。11~13号トレンチがその追跡のあとで、13号トレンチで反対側のブリッジの肩を発見した。

下原古墳は墳丘の周りに10数個所（実数20余）のトレンチを配し、周溝の検出につとめた。各トレンチにあらわれた周溝の状況から、北側に周溝の開口部があり、ブリッジの幅約4mあることを確かめることができた。隣接するトレンチの周溝があらわれた地点を破線で結べば、ほぼ円に近い形になるが、場所により周溝幅も広狭ささまざまであった。2号トレンチでの周溝幅は4m余で異常に狭く、隣の1号トレンチでの8m余の周溝幅と対照的である。林木にはばまれ意図するところの発掘が出来なかつたが、今後何らかの形で追及する必要があろう。

周溝の落ち込み（肩口）の状況も場所によって高低まちまちで、墳頂を0mとした場合、7号トレンチ(-)4.12m、6号トレンチ(-)4.15m、8号トレンチ(-)4.20m（以上いづれも外側）が高いところで、2号トレンチ(-)5.77m（内側）、(-)5.80m（外側）、4号トレンチの(-)5.72m（内側）が周溝落ち込みの位置が低いところである。周溝の状態は地形に制約され、長い歴史的変遷の中には開墾等により変容を余儀なくされ、古墳築造時の姿をしてないことはいうまでもない。



第25図 狐塚古墳平面図

キツネズカ
(5) 狐塚古墳 (第25・29図)

この地方で「狐塚」と呼ばれている古墳は、下原古墳の東北約50mの山道を距てた山林の中にある。この古墳は石室墳で、古くから開口していたらしく天井石その他石材が失われている。側壁等の並び具合から横穴式石室墳で南又は北を向いて開口しているものと考えられる。

狐塚古墳の周溝確認の手順として、石室西側に1号トレンチ、ついで石室をはさんで東に2号トレンチをやや長めに設定した。以後、石室を中心にしてトレンチを各方向に設定し、時計と反対のまわりに3、4、5、6、7号と遂次発掘を進めた。トレンチは周溝の落ち込み、肩口の発見に止めたが、各トレンチはそれぞれ内側、外側の二箇所を発掘した。その際、古墳の所在する一帯が山林で樹叢に覆われているため、樹木が障害となり、必ずしも当初企図する地点の発掘は出来なかった。その後発掘可能な地点を選び、2号と3号の間と、5号と1号の間に各一箇所、6号と1号の間二箇所を発掘し周溝の確認につとめた。

1号トレンチは石室の西側に設定した。トレンチは、はじめ約9mの長さを発掘したが、そこで周溝が現われなかつたので約2m延長して造構の確認に当たった。その結果、ここまで周溝がおよんでいない、それとも周溝の開口部である可能性がでてきた。ちなみに1号トレンチの土層は、Ⅰ層表土で層厚10cm前後、表土は落葉等により汚染され黒褐色を呈していた。Ⅱ層は暗褐色土で層厚20cm前後、以下Ⅲ層は橙褐色の粘質土でここでの地山である。

2号トレンチは石室を挟んで1号トレンチの反対側に設定した。このトレンチでは、現墳裾(石室横の傾斜転換点、以下同じ)より約6mのところに造構が検出され、周溝の内側の落ち込であることを確認した。周溝の内側落ち込みは地表下23cmの比較的浅いところで検出されたが、周溝の外側落ち込みはかなり深いところで発見された。Ⅰ層の表土の層厚は10~13cmで、トレンチ全体として大きな違いはないが、Ⅱ層の暗褐色土は周溝の内側落ち込み付近で層厚13cmであったのに対し、周溝の外側落ち込みの部位では53cmの層厚であった。周溝幅約5.7mでⅡ層下端から掘込まれ、中に黒褐色土が詰まっていた。Ⅲ層は地山で橙褐色の粘質土であった。

3号トレンチは石室の北東部に設定した。ここでは墳裾より約5mの地点に周溝の内側の落ち込みが、墳裾より約12mのあたりに周溝の外側の落ち込みを検出した。ここで溝幅約7mであるが、周溝の内側の肩口の線のまわりに対し外側の肩口の線が同心円的でなく、北側の方が開き気味であった。

4号トレンチは石室の北側に設定した。墳裾より約5mのところに周溝内側の落ち込みがあらわれ、周溝外側の落ち込みは墳裾より11.4mのところで検出された。ここで周溝幅は6.6mであった。

5号トレンチは石室の北西部、4号トレンチと1号トレンチの間に設定した。内側と外側の二点を発掘したが、樹木の関係で同一直線上にトレンチを設定することが出来なかつた。このトレンチでは周溝の内側は墳裾より約6mの地点に、周溝の外側の落ち込みは墳裾より12.3mの地点に検出された。またここで周溝幅は約6.4mであった。

Ⅲ 調査

6号トレンチは石室の西南へ向けて設定した。このトレンチでは墳裾より約6mのところに周溝の内側の落ち込みが、さらに墳裾より約10mのところに周溝の外側の落ち込みが検出された。ここで周溝幅3.6mと狭く、やがて周溝が消滅することが予想された。後刻、このトレンチの西側に8号トレンチを設定し、周溝の状態をしらべた。

7号トレンチ、この地点でも松林などのため意図する地点にトレンチの設定が出来なかった。試掘の結果、ここでは墳裾より6.4mのところに周溝内側の落ち込みが発見され、さらに周溝外側の落ち込みは墳裾より12.5mの付近に検出することが出来た。7号トレンチでは周溝が直線上に設定出来なかつたが、周溝幅は約6mとみるとることが出来る。

その他のトレンチ、6号トレンチと1号トレンチの間に8号トレンチを設定した。ここでは、約5mの長さを発掘したが周溝その他の遺構は検出されなかつた。そこで、8号トレンチと6号トレンチの間に周溝の端（ブリッジ）があるものとみて、樹間を縫ってトレンチを設定した。トレンチの方向もこれまでの各トレンチと違い、周溝を検出し易くした。このトレンチでは、トレンチを斜断する形で周溝の一部があらわれ、先ずは目的を達することが出来た。

1号トレンチと5号トレンチの間に周溝の切れ目のあることは確実で、ここでも周溝検出のため、樹間を縫ってトレンチを設定した。ここでも目的に沿って周溝を検出することが出来た。

狐塚古墳の周溝検出調査で判明したことは、石室の西側の周溝のブリッジがあることがほぼ明らかになった。この一帯が樹叢に覆われているため、発掘地点選定にあたり思うに任せせず、開口部も推定にたよらざるを得なかつた。周溝の幅も地点により広狭の差があり、広いところで3号トレンチの7mがあるが、溝幅6m前後のところが多かつた。

次に、狐塚古墳の周溝の肩部出現の部位を比較すれば（残存せる墳丘の最高の地点を0mとして）、最も低いところが2号トレンチ外側の（-）2.53m、ついで3号トレンチ外側の（-）2.09mである。2号トレンチの内側の（-）1.93m、3号トレンチ内側の（-）1.76mあたりが低位の部位にある。また周溝の肩部出現の部位の高いところは、6号トレンチ外側の（-）0.82m、ついで同内側の0.85mである。

以上の様に、周溝の肩部出現の部位は地点により異なるが、現地形の石室西北部が高く、石室東側が低いことにも起因しよう。石室東側に設定した2号トレンチではトレンチの両端では約1mの比高差があり、墳裾の東18mの地点に傾斜転換点がある。現在の狐塚古墳の周辺は山林であるが、或時点に煙（焼烟？）として均平化された可能性が強い。

狐塚古墳の墳丘の規模がどれ位であったか、それについて資料が残っていない現在、にわかに断定することは難しい。周溝の内側の線が直ちに墳丘の裾廻りであるという保証はないが、およそ墳径18m前後のものであったことが考えられる。

狐塚古墳の周溝調査でハニワ等の遺物は出土しなかつた。しかし、1号トレンチ発掘の際、石室よりの地点の表土（擾乱土）の中から須恵器の破片1個が出土した。遺物の評価もきるこ

とながら、狐塚古墳の破壊された石室の状況から見ても古墳時代後期に位置づけられることは間違いない。

(6) 岩原古墳群出土遺物 (第30・31図)

本調査事業の本来の趣旨からして、古墳周溝の確認ということであり、発掘にあたっては一部を除き周溝の確認に止めた。そこで、出土遺物も表土（第Ⅰ層）又は周溝上面の黄褐色火山灰土（第Ⅱ層）から発見されたものが大部分を占める。

古墳参考地B 第30図上段に図示したものは古墳参考地Bから出土したもので、1～4は5号トレンチ周溝内より発見された。いづれも円筒ハニワの破片で、オレンジを帯びた褐色の器面は磨耗している。1、2号トレンチはタガが剥離し、剥離面にはタガを貼付け前の刷毛目調整痕がある。

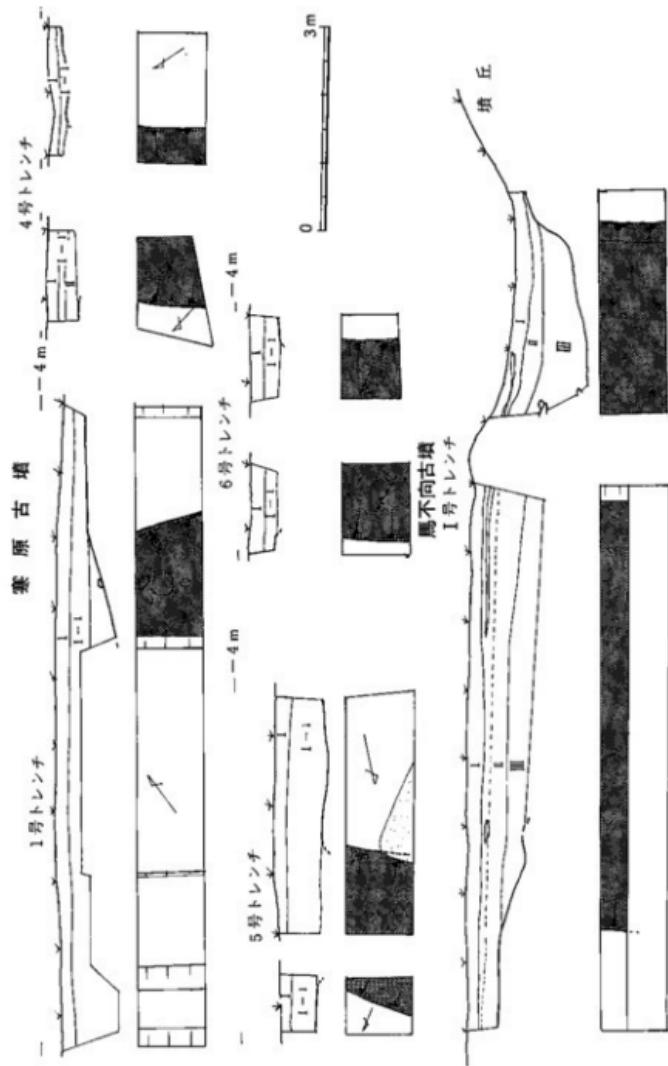
下原古墳 第30図中段1（須恵器）および2（土師器）と、第31図1～16（ハニワ）は下原古墳調査の際発見された遺物である。第30図中段1は9号トレンチ内側の表土中に包含されていたもので、須恵器の器台である。破片は脚の一部で、復元底径20cm余、数条の凸帯をめぐらしている。また脚部から3段目の凸帯の間には飾り穴がある。第28図中段2の土師器片は3号トレンチ内側出土のものである。口縁の一部とみられるが、細片であるため形状は明らかでない。

第31図1～16はいづれもハニワの破片で、3号トレンチ内側、第Ⅱ層又は周溝（第Ⅲ層）上面から出土したものである。1～3は朝顔形口縁をもつハニワの破片で、1は口縁端末、2は口縁下、3は肩部とみられる。胎土中に石英粒を含み、褐色の器面は焼成不良、4～12は凸帯のある部位の破片で、凸帯もコの字形を呈するが張し出し具合に微妙な違いがある。13～16は円筒ハニワの脚部で、接地面が平らなものと14の例にみる様に起伏をもつものとがある。起伏あるものはハニワ製作時の指による押圧痕とみられる。ハニワ片は一部を除き焼成不良でとくに13・14・16の器体は軟弱である。器面の色調は褐色から赤褐色を呈する。

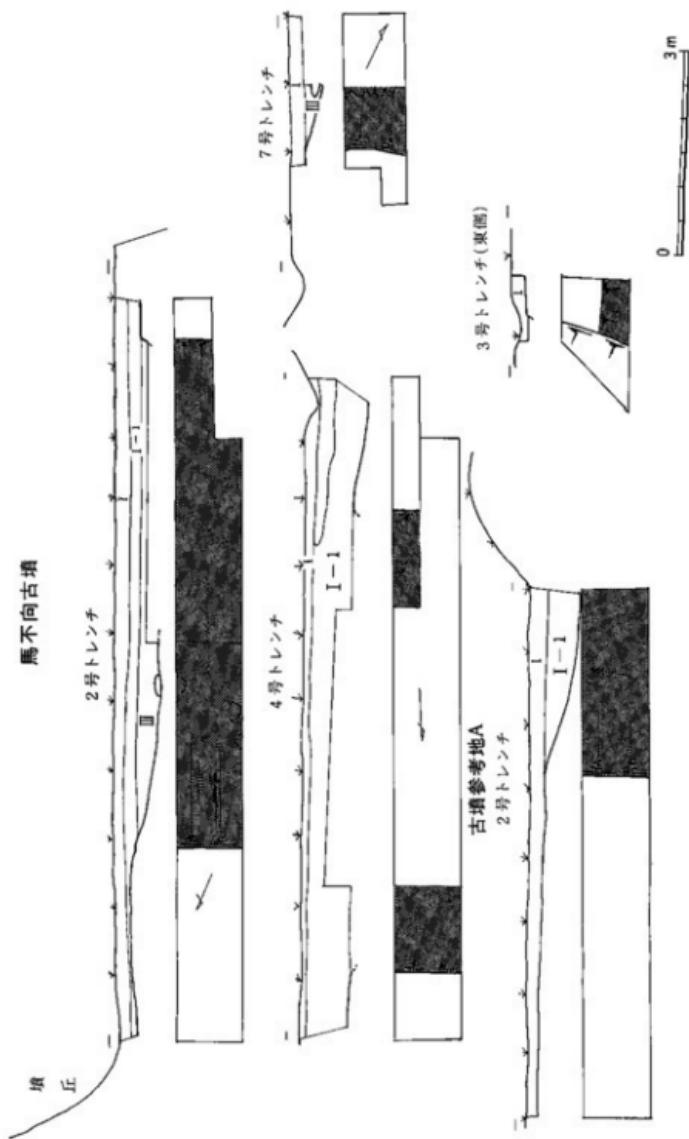
下原古墳の周溝部試掘に先立つ周辺の踏査で、墳丘裾部から多量のハニワ片を採集した。ハニワは葺石に混って各方面に散乱していたが、いづれもタガ部を含まない円筒ハニワの破片であることから、誰かが採集した資料を撰別し現地に放棄したものとみられる。

狐塚古墳 (第30図下段) 1、2は1号トレンチ発掘の際、石室寄りの表土中より発見された須恵器片で、1は甕の肩部、2は高坏の口縁部の一部である。高坏は復元口径9.7cm、器体の一部に吹出釉がある。狐塚古墳から他に出土遺物はないが、石室盗掘の際遺物が散乱、放棄されたものかもしれない。

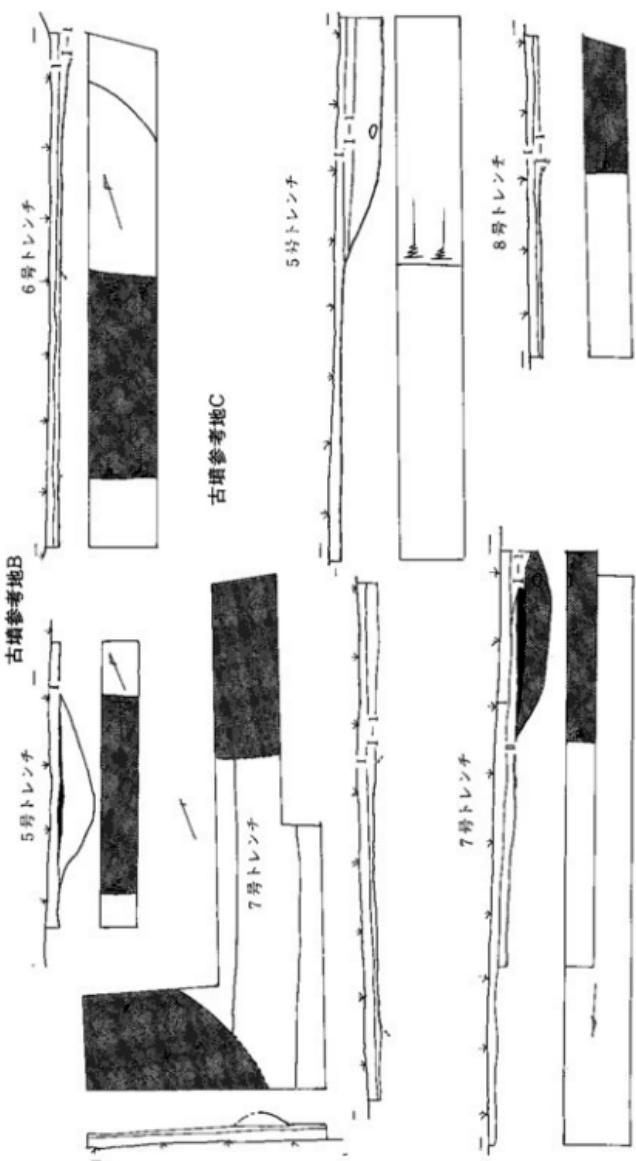
(緒方)



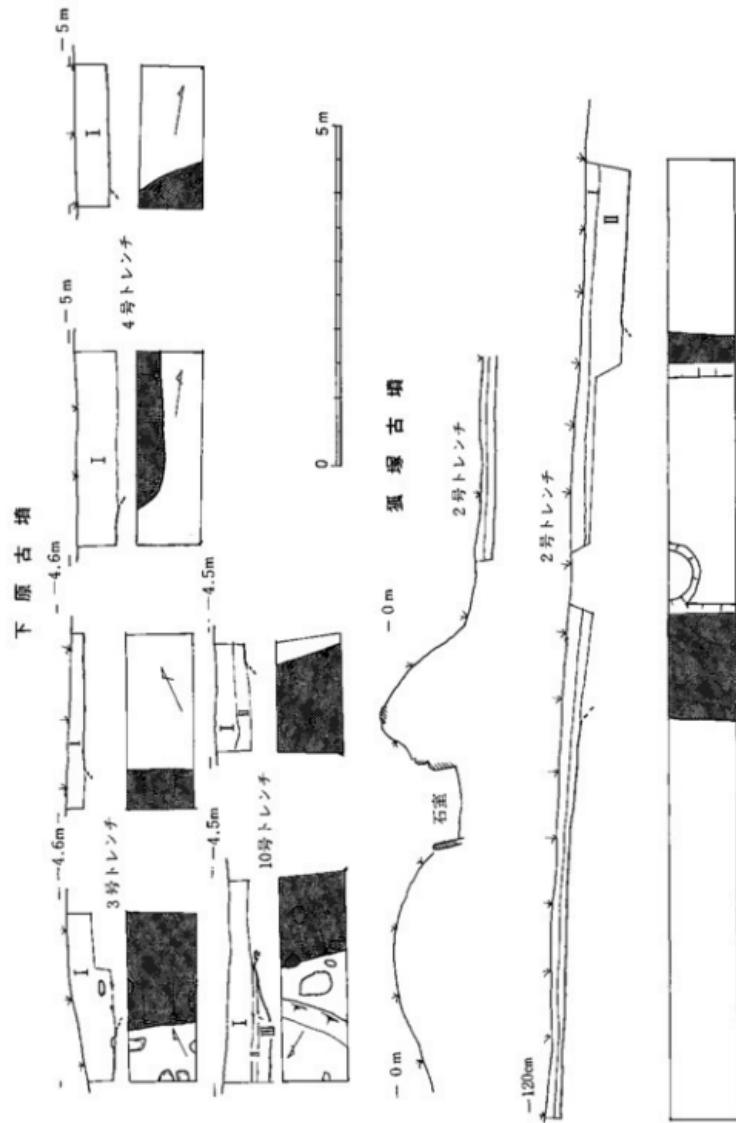
第26図 岩原古墳群各トレンチ図(1)



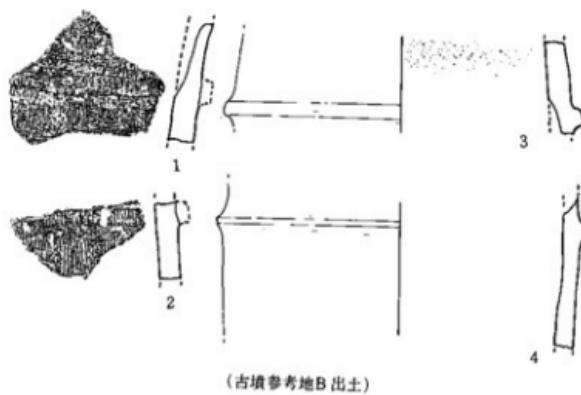
第27図 岩原古墳群各トレンチ図(2)



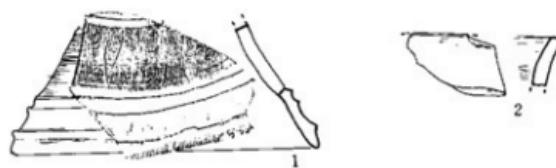
第28図 岩原古墳群各トレンチ図(3)



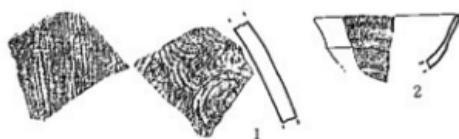
第29図 岩原古墳群各トレンチ図(4)



(古墳参考地B出土)



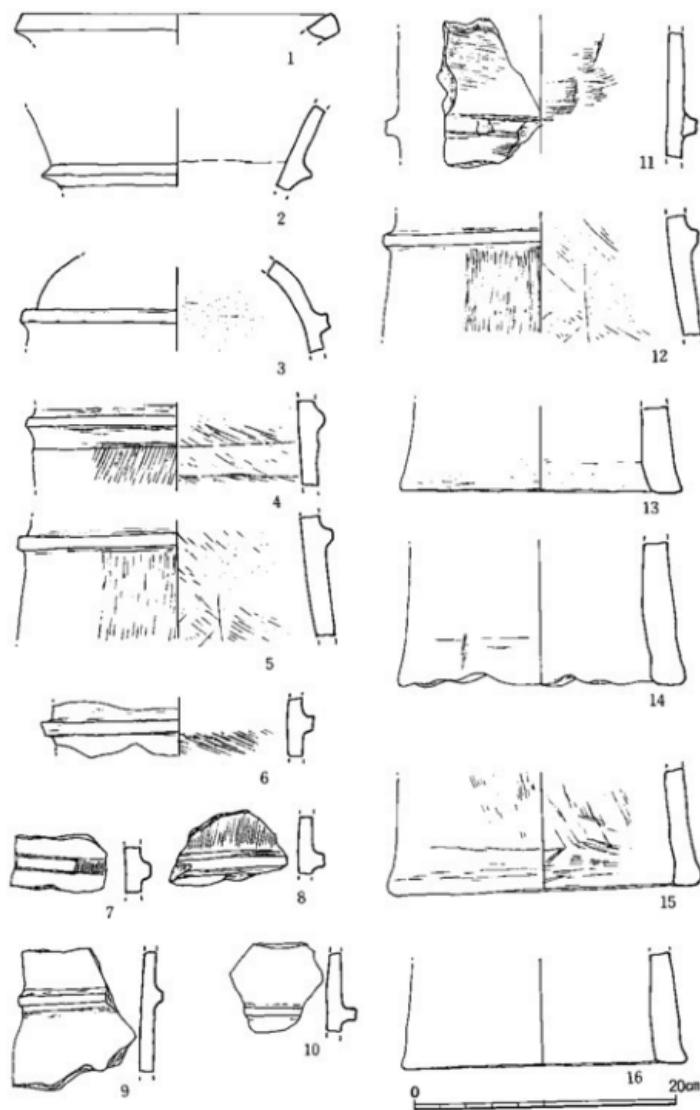
(下原古墳出土)



(狐塚古墳出土)



第30図 岩原古墳群出土遺物(1)



第31図 岩原古墳群出土遺物(2)

IV 調査のまとめ

本事業は国庫補助事業で、「風土記の丘」構想に基づき古墳周溝の確認調査を実施したものである。その実施にあたり、清原地区（菊水町）においては虚空蔵塚古墳、塙坊主古墳及び、京塚（伝）古墳の三地点について調査を実施した。また岩原地区（鹿央町）では双子塚を除く各古墳、さらに古墳参考地のA・B・Cの三地点を調査の対象とした。調査地の大部は私有地で、個々地権者等の協力の下に調査を実施したが、場所によっては耕作上の都合もあって発掘を断念し、山林においては立木が障害になり地点をずらして発掘を実施した。以下、清原・岩原の二地区について調査を集約しまとめにしたい。

清原地区では昭和50年度、地元の菊水町が実施した「清原遺跡確認調査」の調査結果を大要において追認する形になった。虚空蔵塚古墳では墳丘北西部に地点をしぶって発掘を実施した。発掘の結果、前方部の端末に花崗岩の母岩が埋没しており、その位置で周溝が終っていた。今次は前方部正面を発掘しなかったので、周溝についてこれ以上のことは明らかでないが、一先ず帆立貝式の前方後円墳とみることが出来よう。周溝中の遺物として、人物ハニワの完好的な頭部が出土したことは、今後虚空蔵塚古墳の性格等を考える上での収穫である。

塙坊主古墳についても、結果的に昭和50年度調査の結果の追認ということになったが、個々の造構（周溝）の状態がより鮮明になった。虚空蔵古墳でもそうであったが、後代の攪乱があり、五輪塔、近世陶片が出土した。

京塚（伝）古墳周辺では、1・2号トレンチ造構なし、50年度調査で性格不明の溝と報告された造構は古い時期の土壤と考えられる。また菊水町歴史民俗資料館入口付近に設定した7・8号トレンチで50年度調査時検出の溝が発見されたが、これは古墳周溝でないことが判明した。

岩原古墳群では双子塚を除く既存の五基の古墳と、三箇所の古墳参考地について周溝の検出作業を実施した。その結果、寒原2号墳を除く各地点で周溝が検出された。寒原2号墳では地均し等により周溝が削り去られた可能性があり、寒原古墳では墳丘南西部に谷が入込んでおり、元々この部位に周溝をめぐらしていたかについては疑問である。古墳参考地Aについては一部に周溝とみられる溝状の造構が検出されたが、耕作者の都合もあって、充分溝の範囲を確認するに至らなかった。古墳参考地Bについては、ハニワ片も出土していて古墳周溝に間違いない。古墳参考地Cでは残丘中に古墳石材とみられるものが埋没していて、残丘北側に設定した7・8号トレンチの状態から古墳残丘とみて差支えなかろう。下原・狐塚両古墳の周辺は山林で、周溝検出のためのトレンチ設定には苦慮したが、周溝の状態をほぼ明かにすることが出来た。下原古墳の周溝は墳丘北側にブリッジがあることが明確になったが、狐塚古墳について

は一応西側にブリッジを確認したが、樹林にはばまれ納得ゆく程の結果ではなかった。後日必要な時点に調査を重ねる必要があるう。

(緒方)



2号トレンチ



3号トレンチ発見の土壤断面

虚空蔵古墳1(清原古墳群)



4号トレンチ南側（東より）



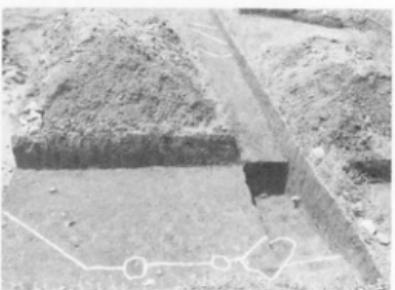
4号トレンチ北側（東より）



4号トレンチ



4号トレンチ（北より）



4号トレンチ（南より）

虚空蔵古墳2（清原古墳群）



2号トレンチ及びその拡大区



2号トレンチ拡大区花崗岩母岩

虚空蔵古墳3(清原古墳群)



2号トレンチ（周溝断面）

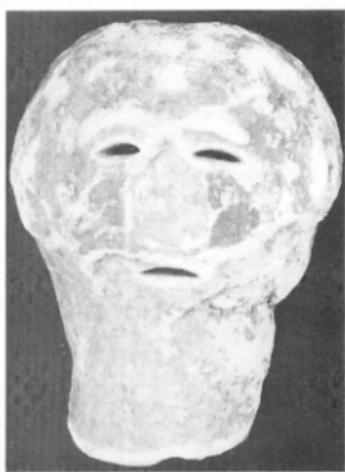


2号トレンチ人物ハニワ出土状況

虚空蔵古墳4（清原古墳群）



2号トレンチの人物ハニワと同出土状況



虚空蔵古墳5(清原古墳群)

2号トレンチ出土の人物ハニワ



上　面



正　面



右　側　面



背　面



左　側　面

虚空蔵古墳6(清原古墳群)



左上 6号トレンチ

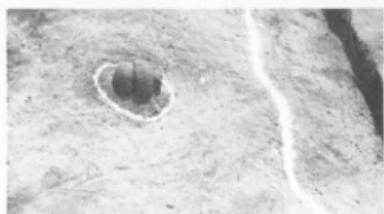
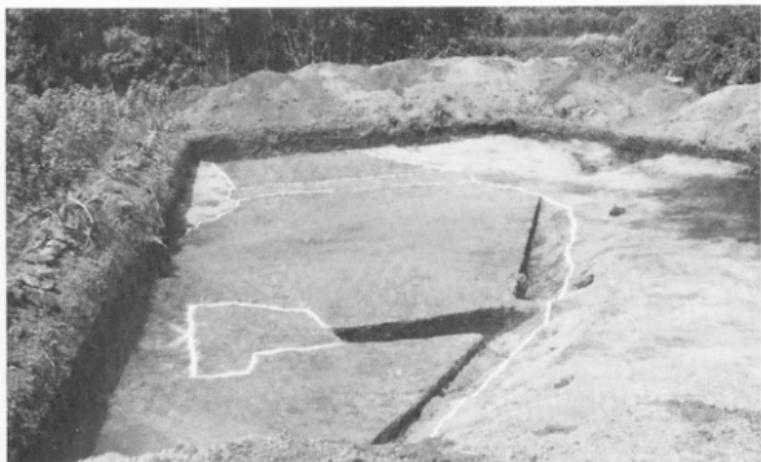


右上 4号トレンチと墳丘

下 4号トレンチ



塚坊主古墳1(清原古墳群)



塚坊主古墳 周溝屈曲部附近

上 南から

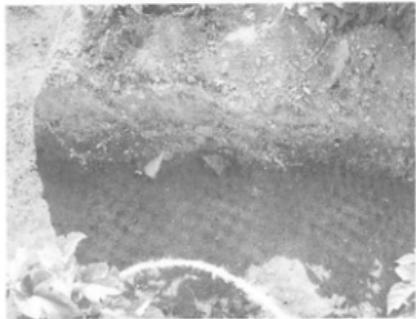
中 北から

下 五輪塔残欠

塚坊主古墳2(清原古墳群)



前方部コーナー部
上右 1・2号トレンチ
上左 2号トレンチ
下右 2号トレンチ
下左 1号トレンチ



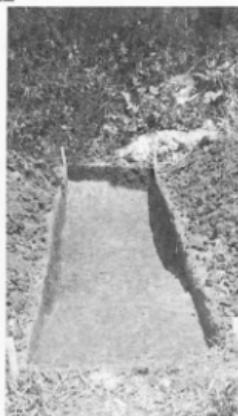
塚坊主古墳3(清原古墳群)



左
1号トレンチ



右
2号トレンチ



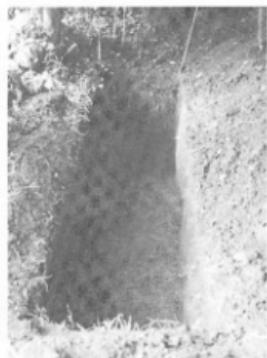
下左より3・4・5号トレンチ

京塚(伝)古墳周辺1(清原古墳群)

左 4号トレンチ
断面



左 4・5号トレンチ発掘後
右 6号トレンチ



左
8号トレンチ



右
7号トレンチ

京塚(伝)古墳周辺2 (清原古墳群)



伝京塚（土壙）



土壙検出状況(左)



発掘後 北から

京塚(伝)古墳周辺3 (清原古墳群)



馬不向古墳(右)
と古墳参考地A(左)



馬不向古墳(中央)と
古墳参考地A(右)B(左)



双子塚後円部(南から)

古墳景観(岩原古墳群)



岩原古墳群遠望 中央双子塚 右馬不向（寒原墳頂上より）



寒原古墳

各トレンチの状況

左から1・2・3号



寒原古墳 4号トレンチ



寒原古墳 5号トレンチ

寒原古墳他（岩原古墳群）



馬不向古墳
(北より)



4号トレンチ
(周溝中に葺石混入)



馬不向古墳(岩原古墳群)



古墳参考地A（上）
東より



7号トレンチの溝発見状況
(中・下)



古墳参考地A（岩原古墳群）



古墳参考地B
背景は双子塚後円部



5号トレンチ
土層断面



6号トレンチ

5号トレンチ

古墳参考地B (岩原古墳群)



古墳参考地C遠望 (双子塚古墳より)



5号トレンチ (西より)



古墳参考地C (東より)



1号トレンチ



1号トレンチ中のハニワ片

古墳参考地C (岩原古墳群)



下原古墳墳丘（南から）



10号トレンチ周溝検出状況（下二枚）

下原古墳1（岩原古墳群）



5号トレンチ

上二枚



4号トレンチ

周溝ブリフジ

検出状況

下原古墳2(岩原古墳群)



狐塚古墳残丘



2号トレンチ（西から）

狐塚古墳1（岩原古墳群）



狐塚古墳石室現状



狐塚古墳残丘
1号トレンチ側から



双子塚

狐塚古墳2 他（岩原古墳群）

**清原古墳群及び岩原古墳群の
周溝確認調査**

熊本県文化財調査報告 第55集

昭和57年3月25日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 熊本県教育委員会
熊本市水前寺町18番1号

印刷 熊本県印刷センター
熊本市清水町高平1255
電話 (0963) 44-8321

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 55 集を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日